第11回 銀華文学賞発表

十一回目となった銀華文学賞は今回もまた日本全国およびインド、フランスなど海外からの作品を含め、三七六篇という多数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・都築隆広・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。また御遺族の御厚意により河林満賞も併せて選出させていただきました。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は六〇号以降に順次掲載させていただく予定です。

第十一回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一五年二月一五日（日曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞／現代詩賞／イラスト・漫画賞／まほろば賞と併せて行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いのうえ御出席ください。

なお銀華文学賞はまことに申し訳ございませんが、新たな形へのため、二年ほどお休みをさせていただきます。まほろば賞など他の賞は継続いたします。投稿は受け付けます（掲載審査料三千円を添えて編集部にお送り下さい）。優秀な作品は文芸思潮優秀賞・奨励賞として掲載させていただきます。

銀華文学賞

当選

「天空に打つ」　工藤辰吾（千葉県山武市）

「アクリル板」　原浩一郎（滋賀県大津市）

河林満賞

「背信」　来の宮あんず（東京都江東区）

優秀賞

「クーデター」　六藍光洋（兵庫県神戸市）

「ワニタンうどんはソマリア・レシピ」　大森康宏（兵庫県神戸市）

奨励賞

「ハーネス物語」　小笠原新（山形県酒田市）

「首輪」　竹内　稔（東京都西東京市）

「ガラスの檻」　櫻田秀三郎（兵庫県宝塚市）

「父にあいたい」　浦上京子（大阪府寝屋川市）

「シャガ」　脇田　正（福岡県福岡市）

「ラスト・トゥデイ」　大島直次（埼玉県新座市）

「妻恋い」　遠道日暮（長野県大町市）

「捨てさる」　田代理恵（東京都江東区）

「命日」　河野つとむ（神奈川県横浜市）

「曇天のオリーブ」　田窪宣彦（大阪府堺市）

「きのう。きょう。」　白石美津乃（愛知県名古屋市）

「霧ヶ丘公園のパポーマン」　王蜂（キング・ビー）（東京都多摩市）

「『コーナー』で会った女」　土岐田耕（大阪府豊中市）

歴史小説奨励賞

「猫忍の村」　大森耀平（栃木県足利市）

「水車」　西田信博（茨城県つくば市）

「景珂」　吉田宏子（宮城県仙台市泉区）

佳作

「斎場の雨音」　高岡啓次郎
「遊女の離縁状」　岡田治朗
「華やいだ幻想の彼方は」　佐山広平
「安謝浜疑獄」　平安名尚
「オメカケさん」　馬込太郎
「ふたたび青春を」　飯島もとめ
「再起をかける」　佐藤義弘
「水たまり」　氷川　順
「指」　渡邉眞美
「YES」　田中智之
「裏街、もしくはマーメイドの生成」　小林英実
「小さな昭和史『香椎会談』」　森千恵子
「自転車泥棒」　紙屋里子
「旅の果て」　山崎人功
「ヘッドライト」　上村淳三
「秩父へ行く」　小野友貴枝
「月光の曲」　北条かおる
「遠雷人」　山本子峰
「就活」　井上理博
「如月の虹」　安良川健介
「傷」　室町　眞
「旅立ちの情景」　芳井　明
「絆歌」　大見佐耕
「山の荷」　佐斗有崇緒
「接着剤」　林　道代
「揺らぐ照星」　梶川洋一郎
「ミノタウロスの水辺」　桐本千春
「藤の台団地」　前岡光明
「盗蜜の味」　市原浩子
「契し男」　森　幸夫
「まつぼっくり」　上野　歩
「再生」　木川雅樹

歴史小説賞佳作

「遊女の離縁状」　岡田治朗
「安謝浜疑獄」　平安名尚
「仇討ち」　内藤久男

力作がそろった

大高雅博

今回は力作がそろった。力作というのは、オリジナリティーがある作品が多くあったということである。長年、下読みや、選考委員をやっていると、書き手のせいではないが、類型的な作品が目立つようになる。今回は、そうではない作品が多かったことになる。

当選作工藤辰吾「天空に打つ」は、そういう意味では今回の典型のような作品である。囲碁と、広島の原爆と、呉清源。戦争中でも、本因坊戦を行おうとした人々がいた。それも、広島を舞台としてだ。当局のごりおしで、会場が代わり、棋士達は助かった。すでに物語が始まっている。そして、最強の棋士といわれた呉清源が登場する。囲碁には門外漢の僕でも知っている棋士達が登場する。よく資料を調べてある。ノンフィクションに近いということで、時代物ではないかとの意見が出るかもとは考えた。しかし、

河林満賞の創設について

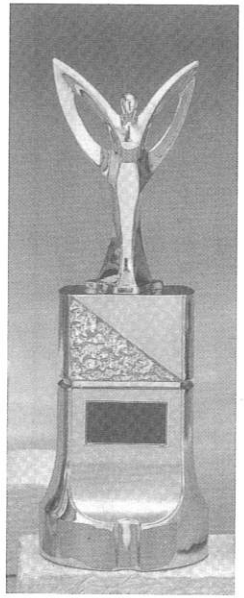
河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



結局は、あっさりと当選に決定した。良い作品である。

当選作、原浩一郎「アクリル板」は死刑囚とその面会人とのシチュエーションで、前にも何度かそう言う小説は読んでいる。ただ、この死刑囚の、一筋縄ではいかない性格にリアリティを感じる。恐らく、実際にあったことなのだろう。その強みがある。

河林賞、来の宮あんず「背信」は、僕はこの作品も当選作で良いのではないかと思った。河林賞に選ばれて良かったと思う。この作品で、何か、どこかの境を越えたような気がする。ただ、この作品の魅力を伝えるのは難しい。筋を追っただけでは分からない。彼女の持っていた毒が薄れたのではないかとの意見もあったが、僕はそうは思わない。「小説」が持っている力の源泉のようなものに作者は近づきつつあるのかもしれない。

優秀作、六藍光洋「クーデター」はアフリカのODAを主題にした、珍しい作品である。

奨励賞、勢隆二「封鎖海峡」は戦後、奄美に帰る船について、書かれている。その海の描写が優れている。

同じく、田代理恵「捨て去る」は、土葬や猫が出てくるが、筋というよりは、独特の世界があり、興味をそそられる。

また櫻田秀三郎「ガラスの檻」は戦後、中国へ取材に行く話で、やはり書くべき話である。

その他にも、奨励賞小笠原新「ハーネス物語」（盲導犬との話）、白石美津乃「きのう。きょう。」（亡くなった夫との思い出を中心に書かれているが、独特の雰囲気がある）は良かった。

桐本千春「ミノタウルスの水辺」（珍しい少女が出てくるSM風の作品）佐藤孝男「山の荷」（祖母を背負って山を登るという、珍しい素材）上村淳三「ヘッドライト」（この枚数ということを考えると、エンターテイメントとしては良いできだと思う）田中智之「YES」（多少作り方に無理があるかもしれないが、衝撃力がある部分はある）にも注目した。

以上のように多種多彩で、実りの多い銀華文学賞となった。ただ、毎回言っているかも知れないが、題名は、後で、その題名を見たときに、内容がすぐに思い出せるようにした方がよい。これだけの量の作品を読むと、内容が良くても、すぐに思い出せない作品がある。それは、ひどくマイナスになる。細部まで、気を遣ってほしい。

銀華文学賞優秀賞メダル

選評

入選

「心に住む魔物」　上杉　辰
「追憶」　五十嵐丈彦
「幻仙奇譚」　一之瀬和男
「甲子夜話異聞」　千津敬紀
「一乗谷・諏訪館跡に立つ女」　藤井典央
「瓶の中の血」　清水利章
「アデイオス、アミーゴ」　佐藤英行
「羽根雲」　小倉章志
「黄昏の彼方」　喜多文秀
「墓参り」　十八鳴浜鷗
「グレープフルーツ」　菊池　洋
「べんたろさん」　成平一平太
「わかれみち」　大江純子
「図書館で知り合った老人」　森永昌雄
「すずらん」　吉田三夫
「来訪者」　きひつかみ
「幸福測定器」　中他見男
「片恋」　西谷　守
「ももいろ　うーちゃん」　いまだまりこ
「知床へ」　高岡賢三
「東京薄暮地帯」　戸澤洋二
「まどろみのそのさきへ」　舟橋空兎
「夢鉄道」　塩崎勝彦
「小屋」　右田洋一郎
「邪馬台国　幻想」　蘭　藍子
「カライモ畑の天使たち」　坂上弘之
「鵺が啼く」　飛葉哲郎
「共生生活」　西本美彦
「ケジメ」　赤間芳太郎
「深い疵」　梁田信子
「胸の洞」　丸山　史
「青花」　山田真弓
「魚鬼」　塩崎憲治
「化身」　杉山千里
「津軽藩大量死事件その後」　野原憲次
「昭和の青春」　磯部　彰
「ロケットペンダント」　椿山　滋樹
「妻はつらいよ」　三浦喜代子
「高越山」　高木　純
「富士を描く」　谷　光洋
「はじまり」　田森　龍
「嫁が島伝説」　白井　康
「咲くやこの花」　丸山　温
「散華の木」　関口　彰
「アマランダの追憶」　李耶シャンカール
「オットセイの骨」　伊藤一彦
「式典の後」　有原海実
「思い出帰り」　星野　透
「天国から来た暗殺者」　有汐明生
「大漁会館」　鈴木無一
「走る」　菅谷春子
「呼び鈴」　上野雄三
「五分の魂」　小藤田一
「論告求刑」　酒井一至
「思春期の未踏」　西條由美子
「風を追う」　武藤蓑子
「小さなスナック」　折口　真
「燎原の火」　横井純子
「若葉の移ろう頃」　瀬川圭介
「わが落魄の思いは」　山本憲明
「鎮まらない家」　齋藤澄子
「告発」　有森信二
「内間運送」　鈴井かのか
「無価値の価値」　待木　啓
「山カフェ・シャングリラ」　井上幸子
「聡子の二週間と二日」　能勢里子
「やまゆり荘物語」　龍野　健
「牛若、鬼若物語」　ヒミ子

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

鮮やかな二本が立つ

五十嵐 勉

第十一回となった今回の銀華文学賞は、トップに鮮やかな二本が立った。一つは工藤辰吾氏の「天空に打つ」で、もう一つは原浩一郎氏の「アクリル板」である。二作が傑出していたために、いつもは激論バトルになる選考会が、すんなり穏やかに、しかし充実して終わった。よい作品を選び出せたという満ち足りた気分に包まれたのは、私だけではなかったはずである。やはり文学賞は、トップに立つ優れた作品がものを言う。その作品の内質が賞全体の充実度を決めてしまうことを、あらためて感じた選考会だった。

「天空に打つ」の工藤氏は毎年興味深い題材を提出してくる歴史小説の領域の書き手だが、一作ごとに手腕が冴え、向上していることに注目はしていた。しかし今回の作品は抜群で、一つの結晶に到達した観がある。もともと題材に対する眼は、鋭いものがあり、埋もれた過去の時間の中から原石を掘り出す力は、「才能」と呼べる卓越したものを備えていたが、この作品は特にすばらしい題材を掘り当てていた。

戦前・戦中の囲碁界の歴史を追いながら、日中戦争に重ねて、呉清源という才能の悲劇性を浮かび上がらせ、さらに太平洋戦争の東京空襲と原爆とのクライマックスに重ねて本因坊戦を照射して、その運命のドラマのなかに、歴史への深い告発を内包させることに成功している。ここにある感動は、囲碁という芸の世界が貫く純粋さと、それによって鮮明になる戦争という歴史の醜貌との対比である。逆にここには戦争によって滅びないもの、それを突き通してなおかつ生き延びる力を明示するものがある。そこまで書き得たことに、この小説の到達と成功とがある。囲碁を知らない人にも読める、圧倒的なドラマを備えている点で高く評価した。

もう一つの当選作、原浩一郎氏の「アクリル板」は、死刑執行される人間とアクリル板を隔てて会話をする元家裁調査官の話である。死刑囚として、あるいはその裁判過程で、死と直面している人間の言葉に、作りものではない緊迫感があり、突きつける刃の鋭いリアリティがある。死を強要される人間と自由に生きている人間と、その境界としてのアクリル板が、会話の剣戟を乗せて、真の言葉の斬り合いを投影する。殺しへと追い詰められる過程の運命と、殺される者として追い詰められる現在の運命の、両方の拷問に耐える命の軋りがある。そしてそれを見つめるしかないこちら側の人間がいる。一枚の透明な板に、絶対の隔絶があり、その斬り合いのなかに、死刑執行される命の足掻きと意味が、いっそう重くのしかかってくる。死刑という、社会が持つ負の部分を、これほど接近した言葉のやりとりの中に卑近に浮かび上がらせた作品を他に知らない。丸山健次の死刑囚を扱った芥川賞作品「夏の流れ」よりもずっと近い位置での言葉のやり取りは、アクリル板の接近感と殺される者の息づきをもっと近くにたぐり寄せて、死刑の実在のリアリティを鮮やかに感じさせる。失われる命の厳粛さを訴えてくる点で、賞に値する重みを感じた。

河林満賞の「背信」は、すでに二度優秀賞を受賞している来の宮あんず氏の作品だが、独特のモノローグの文体が一つの開眼を得たような展開力を感じた。むろん題材は古く、ありふれていて手垢のついた設定でもある。しかしここには執念の花が確かに咲いているのであって、この執着の幻想の上に開花したある運命観は、人生の一面を訴えている。浄瑠璃のような引き絞る声の深い嘆きを引き摺っている。この方法と世界を、来の宮氏は初めて自覚し、自己の文学世界の確立を意識したと想われる。これまで以上の筆の伸びやかさを感じる。到達した一つの基盤の上にさらに大輪が咲きそうな気配に期待して、河林賞に推した。

今回の銀華文学賞のもう一つの特徴は国際的な色彩が豊かだったことである。結果的にそうなったのだが、外国を舞台にした作品に豊かな果実が見られた。銀華文学賞は熟年、老年の創作の題材に認知症などの病や老衰の問題、親子関係の問題などが多いが、その枠を破って地球規模の大きな舞台が広がるのはうれしいことである。考えてみれば、戦後の世代が外国旅行や外国での仕事の広い経験を持つのは、国際化が爆発的に進んだ二十世紀末では自然なことにちがいない。そういう豊かな経験の中に優れた作品が生まれるのは当然だし、またそれが待たれる一面もある。佳作の作品も含め、今回はその結実が特に感じられた。

優秀賞の「クーデター」（六藍光洋）は、アフリカ・ニジェールでのODA通訳の体験を通して描かれた、現地の状況を軸にした政府援助の小説である。この作品の注目すべきところは、ODAの仕組みを含め、海外援助の姿が克明に記されている点である。これまでこのようにリアルに、またわかりやすくODAを小説として描いた作品はなかったのではないだろうか。それは通訳として立ち会った貴重な経験を通してしか語れないリアリティを持ち、重大な問題性を孕んでいる。また小説として成功しているのは、その援助の問題に留まらず、最後にクーデターという現地の不安定な状況によってすべてが無に帰してしまう不毛感を提出しているところにある。惜しむらくは、「クーデター」というタイトルが一般的に過ぎ、主題を象徴し得ていない

点、援助に対する問題や批判を、状況ではなく、会話によって一部浮かび上がらせようとしている点である。

やはりアフリカを舞台にした作品「ワニタンうどんはソマリア・レシピ」（大森康宏）は、アフリカ現地のリアリティは希薄だが、アフリカと日本を繋ぐ行動の拡大行為に不思議なリアリティがある。日本の日常にありふれたものが、発展途上国などで意外な普及力を示すそこに、現代の世界の広範な繋がりを感じさせる説得力がある。現実にはそううまくいかないことの方が多いのだろうが、楽観的な行為が食という共通した日常性を通して大きな輪を広げていく可能性は確かにある。国境の壁がどんどん低くなっている現代を、うどんのような身近なものを通して表現し得た着眼のよさを評価したい。うどん屋でアルバイトをするアフリカ人留学生が生きている。

これらに勝るとも劣らないやはり外国を舞台にした作品で特に注目したのは、第一次大戦直後のポーランド人孤児の送還を扱った「曇天のオリーブ」（田窪宣彦）である。この題材の特異さは、これまでまったく歴史の底に埋もれていたものを掬い上げた点で、異彩を放っている。ふつう外国を扱うと人物や風景描写が旅行者の目に映るもののように浮いてしまうものだが、それを感じさせない筆致は、長くその風土に馴染んできた経験に根ざしている。その風土に対する誠実さと愛情が、理知的な文章に溶け込んで、重い表現の基盤が感じられる。現代に生きる二世代後の後裔がこのポーランド孤児送還の軌跡を辿る設定もおもしろく、時間の隔たりをうまく立体的に構成していて、現在への再生力を強めている。

これは個人的偶然だが、この舞台の一つであるポーランドのクラクフを、私はちょうど二年前に訪れている。ユダヤ人虐殺の史跡アウシュビッツへ行くには、古都クラクフを経由するのが一般的なので、往復の二泊をそこで過ごしたのだが、歴史を感じさせる街は、ユダヤ人街やシナゴーグなど屈折した過去もそのまま残していて、様々な陰を蔵した重い雰囲気があった。その体験から、ここに書かれたクラクフの描写は本物であることを感じた。もう一つの偶然は、アジア文化社の出版物として、「ユダヤ難民を救った男・樋口季一郎伝」をこの春編集していたことである。「曇天のオリーブ」には樋口季一郎という人物が謎の重要人物として登場する。事件の鍵を握っている男として最後までその存在を引き摺る。この「曇天のオリーブ」には、「ユダヤ難民を救った男・樋口季一郎伝」の若い頃の活動の一端に繋がる可能性が感じられる。樋口喜一郎が後年なぜナチスに追われた大勢のユダヤ人を救ったのか、その思考の軌跡に関わるものだとしたら、きわめて重要な事実が隠れているのかもしれない。全体に第一次大戦後の日本のヨーロッパにおける諜報活動をよく匂わせている点、歴史の陰

に隠れた裏面をよく掘り起こしている点、そして東欧の空気を誠実に紡いでいる点で、重いものを感じた。ただ、惜しむらくは一つの発見にまで到達していず、「何かありそうだ」とうやむやな気配のうちに閉じているのが、未完成な気がした。この筆者は樋口季一郎をどこまで知って書いているのか、未知数である。この作品のテーマの重みと匂い立つヨーロッパの雰囲気は優秀賞以上のレベルであることは感じたが、何かもう一つの決定的な発見か、あるいはフィクションとしての大胆な構築が最後に欠落していることを考えると、強く推せなかった。書き直すとなると枚数が増えることは当然だが、それらを乗り越えてぜひ完成してほしい。

奨励賞でもう一つ魅かれたのは、「霧ヶ丘公園のパポーマン」（王蜂）である。綱渡り芸人の生き方と挑戦の哲学的な問いを含んだこの作品は、いつ墜落するかわからない危険の上で何を求めるのか、人生の深い問いを象徴していることで、迫るものを胸の中に残す。「綱渡り日本縦断。全国都道府県にある高層ビルの上を綱渡りしながら日本を縦断するというパフォーマンス」は、結局墜落死で終わるのだが、世界中にその行為を続ける人たちが出没する結末も、普遍的な深みを照らしていて、魅力がある。胸に残る一作だった。

「首輪」（竹内稔）は、戦争直後の食糧難の時代に愛犬を人間に食べられてしまった話だが、流れに緊密な集積感があり、それがリアルな迫力となって人間の怖い部分と、時代や山里のすさまじさを浮かび上がらせている。その追い詰めていく収斂の力は並々ならぬ力量を感じたものの、題材がやや古いのと、犬を食べることを特殊に扱いすぎる点が気になった。アジアの一地域では犬をごくふつうに食べるし、沖縄の友人も愛犬を客の饗応に犠牲にした経験を話してくれた。犬喰いは、戦後という遠い位置の問題ではない。それらが少しマイナスにはなったが、練達の手腕はおおいに賞揚したい。

「きのう。きょう。」は、淡々とした日常を綴る文章のなかに生死や命の危うさがちりばめられていて、いい味を出している。軽妙なタッチは嫌みなく日々の不思議さを掘り下げる。ただ、読後がやはり軽くなってしまったのが惜しい。この文体で何か最後に胸に残すことができれば一流だろう。その可能性はあると見たい。

女性との情事のなかに人生の時を振り返って刻む一貫した筆を進める土岐田耕氏も、今回は「『コーナー』で会った女」で新鮮な角度から健筆を示してくれたし、毎回変化に富んだ素材を作品にする小笠原新氏も犬のストーリー「ハーネス物語」で感動を構築していた。

歴史小説の分野は今回はやや不作だったが、「猫忍の村」の大森耀平氏は興味深い題材を手堅い筆致であいかわらず

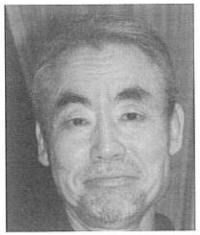
の健在ぶりを示していた。

中国ものを一貫して書き続けている吉田宏子氏の「景珂」も姿勢の真摯さを感じた。

全体として、大きな結実を見せてくれた第十一回の銀華文学賞で、一つの大きな区切りを飾ることができた気がする。これまでの健闘に心からの拍手を送ると同時に、今後のさらなる健筆を深く祈りたい。

力作が集まった今回

八覚正大



第十一回目を迎えた今回は、かなりの力作が集まったといえよう。

最終選考に五十三作が残る……そんな賞は他にはないと思う。選考委員としてはくたびれる思いは感じるとともに、「人間という立体の様々な断面を描く行為」に対し、選者というのも、これまた一人の人間の目からの判断（光の当て方）なわけで、色々な小説が有るのだと改めて学ばせてもらった……希有な賞。

さて、今回の受賞作「天空に打つ」（工藤辰吾）からコメントしてみよう。囲碁についての戦中から戦後の話。その本因坊戦が昭和二十年八月六日広島市中島で行われる予定だった……すでにここに読者を惹き入れる何かがある。それは急遽五日市に移されて爆風のみですんだのだが、終戦間際にも碁を打ちつづける人間の執念と、それゆえに時代の激動を超えて生き延びる生命の逞しさの在り処に気づかされるのだ。

タイトルがいい。19×19の目の碁盤、ある意味でたったそれだけの世界。しかしそこには先ほど述べたような、時代を超えて繋がっていく人間の生命の開ける空間がある。呉清源という中国の天才少年を育てた瀬越八段の思いも鮮烈だ。かつて列強に乗っ取られ、また満州を奪われ、その後幾多の国難を経て世界第二位の経済大国にのし上がった中国。そんな現在にあって、また「囲碁」という頭脳精神世界の一隅に、共有し和し合える何かを求めないか……そんなタイムリーな小説でもある。

作者は、第八回歴史小説賞佳作、第九回歴史小説賞優秀賞、第十回歴史小説特別賞と着実に力を蓄えてきた。前回までは素材は抜群と思えても、文にどこか粗さを感じさせたりもしていた。今回は、その文がなにより読ませるものになっていて驚く。

もう一つ述べておこう。この作品はノンフィクションではない。作者が調べ想像力によって描いたものだと思う。

かつて、事実に基づく作品と調べて描いた作品の優劣が論じられたこともあった。それぞれ深まり行けば、それぞれに優れている――といってしまえば元も子もないだろうが、作品の優劣は読み手によって判断される。その読み手は今回なら、たとえば囲碁に必ずしも精通しているわけではない。そしてもちろん作者が爆風の中、本因坊戦に立ち会っていたわけでも、瀬越八段と面識がありその人物となりを生で知っていたのでもあるまい。それなのに感動を与え、さらには賞の名に値するのはどうしてなのだろうか。それは神の目、揺るがない権威の目など実はないこの世の中で、事実を直接知らないにしても、想像力によって如何に「その場・空間」をリアルに伝えられ、かつ大局的な人間の生き方を見せられるか――その描き方なのである。今回の作は、この文学賞にあってそこに届いた希有な作品である。

「アクリル板」（原浩一郎）は一言で言ってしまえば、死刑囚との関わりの記録の小説化である。主人公は家庭裁判所の事件担当者調査官として約半年、その少年に濃密に交流をもったのである。少年の死刑は、妄想嫉妬的な思いから意図的に親族を殺そうとした殺人未遂に加え、たまたま出会った「知らない男」から、殺してくれと頼まれて殺してしまったことが重なった結果によるらしい。

《多くの人には想像もできないほどに、彼は守られない存在であった》とある。そして、《審判法廷で彼は不貞腐れ、私に憎しみをぶつけた。その目が忘れられなかった。私は人の人生に関わることの恐ろしさを学び、善意にひそむ醜悪な利己心を身を以て思い知った。その六年後に退職したが、彼との体験を超えることも、その傷痕が癒えることもないまま、尾をひいていた》と。さらに《僕の方が、僕の方が、すまなかった、すまなかった》という主人公の侘びの涙になる。しかし、ラストで死刑になった相手が、「化けて出るわ」というかつての会話に《「大歓迎だ」歓迎するよ》と、乗り越えられた心性が描かれて終る。これはサバイバーズギルトに似て、関係した者の心の裂傷（外傷）にも思われる。それを主人公の側から徹底して描き、乗り越えに至ったことは感動に値する。

ただ期待されるのは、それからの主人公だ。トラウマを刻印された関わりのみならず、戦争を含めてさまざまな人間の凄まじい「関わり」における「修復の問題」。この視点にようやくこぎ着けた（内面での和解）主人公は、翻って次にどんな行為に賭けて行こうとしているのか。そこをも読みたい気がしてくる。

以下は、小生の印象に残った作品についてコメントしていきたい。

「クーデター」（六藍光洋）　ニジェールへの日本の経済支援、その通訳になった男から見た、現実のアフリカ世界。当時のアフリカ、植民地の事情が生々しく描かれている。

外交官にならなかった（なれなかった）からこそ、事実を見据えられる感性と目が生まれたのが分かる。ラストのクーデターは衝撃的で、外交上の善意や齟齬が一瞬にしてふっ飛んでしまう事実も迫力がある。内容の濃いノンフィクションとしても価値のある作品ではないかと思われる。

「ラスト・トゥデイ」（大島直次）　人生の辛苦を共にしてきた、ある種「戦友」とも言える親友との別れまで。評者が年齢もそれなりに近いせいか、その感覚がよく伝わり、さらに男同士の友情を超えて、「いまここ」を生きてきた掛け替えのない命の共有の感覚が、見事である。選考会では、最後に実際に旅へ出なければ面白くないという評が聞かれたが、これで十分ではないかと思われる。老いてきた二人が空間的に旅をするというのは、ある種ドラマだ。しかし、この主人公の二人は十分に同行した人生を送って来ているではないか。敢えていえば、その二人の間にも何か亀裂、分かり得ないものもある――という人間の自立・孤立と尊厳の部分をも見せることだったか。私はこの作品が当選でも良かったとは思っている。

「捨て去る」（一色類）　捨ててきてしまった故郷、「実の母でない母」、ネコとのこと。文体は今回読んだ候補作の中で一番文学としての何かを感じさせるものではあった。

「実の母でない母」と繰り返し述べる部分や、不動産屋との対話、その他……独特な雰囲気がある。その文体をもって、今後どのような作品を描いていくのか、楽しみではある。

「封鎖海峡」（勢隆二）　戦後間もなく奄美大島へ帰還しようとした者たちの二重の悲劇。高潮による遭難と、密航として連れ戻されたという……。調べて書かれているとはいえ、遭難場面の描写の臨場感はかなりのものである。想像力のなせる技として評価しておきたい。

「父にあいたい」（浦上京子）　発想がなかなか良かった。性行為を経ないで出産したいという主人公。その後、生まれた命に対し、提供者は事故死していてその祖父母が会いたいと必死になる。その思い、命というものへの視点がいい。性愛を描けなければ小説は成り立たない……なんて言われた男本位の視点は、性の快楽は本能としてあり続けるにしろ一つの分野にすぎなかったと思う。これは人間の命と存在の意味へ突き抜ける射程をもったテーマだ。

「絆歌」（大見佐耕）　老医師がビルマ戦線の戦友（患者）に再会し当時を思い出すとともに、その友情がテーマ。よく描かれていて感動もするが、史実にあいまいさがあるという指摘があった。

「命日」（河野つとむ）　冴えない定時制教師であった男の「ただの」女性関係、しかし後半思いのほか、人間が低い目線からよく描かれていて読めた。

「小さな昭和史『香椎会談』」（森千恵子）　5・15や2・26事件に繋がる、その流れの発端の部分をルポ的に調べた話。その現場の旅館の女将となった主人公（作者）がよく動いている。さらに新しい発見、あるいは想像力によって盛り上げてほしい。

「妻恋い」（遠藤日暮）　妻に先立たれて生きる希望を失った男が水に溺れてしまう。しかし救助されて一命を取り留める。その後、助けてくれた若者たちへお礼にいくシーンが面白い。ある種の出会いであり、相手はけっして人格者ではない、ただのうだつの上がらない青年だったりする。命というものは、まず生きているという最低の条件をクリアするからこそ、いろいろな感情を湧かせ得るのだと、さりげなく気づかせてくれるかのよう。ある種、命の「底着き体験」から得られた人間の生きる意味の表出としてなかなか読めた。

「シャガ」（脇田正）　シャガという花は評者も知っているが、ここでは大人の悲恋を淡々と描いている。引用された詩と、いなくなった女がふっと現れるシーン、そこに描写は極まる。女が名家の出だったり、駆け落ちとか……は作られた感じ。

「揺らぐ照星」（梶川洋一郎）　警察官だった主人公たちの思い出。殉職者を出した場面などかなり重いが、どこか作者との距離が近いせいか逆に小説としての臨場感、面白みがいま一つという感じだった。

「裏街、もしくは、マーメイドの生成」（小林英実）　ストリップ劇場と、そのダンサーとの幻想的な生活。アニマという概念も出されユング的な思索の一例にはなった気はする。でももう少し人生を絡めてもよかったか。

「首輪」（竹内稔）　この作品の魅力は、少年の動物に対する愛と、そしてミステリアスな展開だ。最後は、えっ、犬を喰ってしまっていたのだ！　という驚き。そこから何かが深まると、文学として読めるものになっていたと思える。人間の残酷さと生き延びる命の何か。

「ワニタンうどんはソマリア・レシピ」（大森康宏）　ソマリアにうどんの店を出すという発想と意欲は面白い。ただ、文にもう少し隠し味など入れてほしい、あるいは調味料。

空気を読まぬミノタウロス

都築隆広

自己推薦作が落ちることにかけては定評のある都築ですが、「なんとしても『天空に打つ』を当選させるぞ、ふんす！（かけ声）」と鼻息荒く、今年の選考会場である五十嵐編集長宅に乗り込んだのであります。

ところが、「天空に打つ」は予想以上に選考委員の支持

を集め、「アクリル板」も皆が褒め讃え、当選作二作で早々と選考会が終わり、乾杯とあいなりました。殴り合い寸前か？　という白熱の議論の末に当選作が決まった、エッセイ賞の選考会とは大変な違いであります。

碁打ちが主人公の沖方丁の「天地明察」や少年漫画の「ヒカルの碁」以上の囲碁知識はない私ですが、本因坊戦ぐらいは存じあげております。そんな本因坊戦が原爆投下前夜の広島で行われようとしていた、という「天空に打つ」の着眼点は秀逸でした。本因坊の名を争う名人達ともなれば、碁に命ぐらいは平気で賭けられるはず。そんな勝負師達が戦時下の広島で、本当に命を賭けられたのか？　という命題。さらに、現在は喧嘩ばかりの日中間の友好もテーマに……と、このあたりの話は他の選考委員が書いてくださると思います。ぜひ、一読していただきたい当選作でした。

もう一つの当選作は「アクリル板」。対抗馬が「天空に打つ」でさえなければ、間違いなくトップ独走の作品であったはず。刑務所や死刑囚について書かれた応募作はたまにあるのですが、ここに描かれた死刑囚の「榊君」には妙な人間臭さがありました。誠実さとダメさの混沌が実に罪人っぽく、ああ、こういう人は出てきても駄目だろう。しかし、塀の中にいる限りは善良であり続けるという皮肉が涙を誘います。無機質な「アクリル板」という題名も絶妙でした。

一方、河林賞と優秀賞二作は、どれも個性的な持ち味の作品ばかりです。「背信」は作中の町がスティーヴン・キングのホラー小説に登場する田舎町のように閉鎖的で、些細な出来事にこだわり続ける人々の気持ち悪さが、私好みでした。「クーデター」はＯＤＡの内情を暴露している点が面白かったのですが、肝心のクーデター場面が少なかったのが残念でした。「ワニタンうどんはソマリア・レシピ」はどちらかというとエッセイ賞向きの作品。シニア層にあたる主人公が外国で頑張る点が審査員の平均評価を高めました。

個人的に気に入ったのは、歴史小説奨励賞の「水車」です。中国の石崇（せきすう）なる富豪について書かれたもので、深い人生訓があり、文章にも粗の少ない秀作でした。特に主人公の石崇が優秀な人物であるにも関わらず、性格が悪いところが読者を惹きつけます。ただ、何を原典にし、どのあたりが作者の創作で、どこが史実なのかがわかりにくかった点が残念です。せめて参考文献の一つも欲しいところ。

仰天したのは奨励賞の「再生」。ネタバレになるので詳細は語れないのですが、読んでいて完全に騙されました。最も巧妙に感じたのは、作中の「先生」なる人物が昔、住んでいた富山の家の地図を描いて主人公に見せる場面です。いかにも意味深なので、どんな伏線になるのだろう？　と思って読んでいると、あっと驚かされました。話にリアリティーがないという批判もありましたが、サプライズがあってよろしいじゃありませんか？　タイトルは少し平凡過ぎますけど。

ところで、今回の問題作は、佳作の「ミノタウロスの水辺」という作品でした。女子中学生を縄で縛ってエロスの限りを尽くす物語で、暴力の化身のような番長風の男と、彼を巡る少女達の関係が、クレタ島の迷路に棲む怪物、ミノタウロスと囚われの乙女達になぞらえられており、抜群のセンスを感じます。

とはいえ一読して、奨励賞以上は難しいだろうな、とも思いました。

コンクールにはその賞独自の雰囲気があり、他作品を凌駕できる力量が作者にあっても、表現が前例や常識から逸脱し過ぎると、受賞を逃すことがたまにあります。これを、「空気が読めない枠」と私は呼称しております。「ミノタウロス」もまさにそうした、才気とエネルギーを純粋にぶつけてしまった作品でした。

しかし、あの小林秀雄のデビュー作、「様々なる意匠」も懸賞論文では二席だったことは有名ですし、太宰治や村上春樹といった作家達も当初は賞レースで苦戦続きの「空気が読めない枠」だったのではないでしょうか？　こうしたミノタウロス的破壊力を持った佳作も、上位に食い込んだ作品とは別に、なんとも応援したくなるような魅力を含んでいました。

空気が読めないということは、大物の予感なのですから。

選考を終えて

小浜清志

雨の降る夜だった。西新宿の中上健次事務所近くの居酒屋で私は初対面の男性と向き合っていた。彼の名前と合う理由は前もって聞かされていた。中上健次がとりあえず呑もうと音頭を取り杯を交わしたが、彼は緊張しているのか唇をつけただけでほとんど飲んでいなかった。「こいつが昨年文学界新人賞をとった奴だ、参考になるか分からないけど話を聞いてよ」中上健次が煙草をはさんでいる指で私を指した。彼にとっては中上健次の話を聞きたくて雨の中を来訪したのであって、私の事などまったく興味がないという表情であったが、礼儀として心もち身体の向きを変えた。

私は、ショートホープに火をつけ天井に向かって煙を吐いた。十二社通りを行き交う車が水をはねているのが室内からも見えた。煙を吐きながら懸命に考えをまとめた。彼

の姿は二年前の私であった。文学を志してはみたものの何度も落選を繰り返し、たまたま出会った作家中上健次に未来を託すつもりで原稿をとどけたのである。その原稿は私も読んだが、筆力にまかせて書き進むタイプで、作品の熱が伝わらなかった。私の感想を聞くや、中上健次がそいつと会ってお前の思っていることを言ってやれと言われたのだった。

中上健次は梅干しの二つ入った焼酎を黙って呑んでいる。テーブルが三つの座敷とL字のカウンターには、私たち以外にまだ客はいなかった。出勤してきたパートの中年婦人が前掛けをしめながらカウンター奥の店主に挨拶をする。座敷の私たちへ視線を向けるが声はかけない。有名な作家という認識はあるが、彼女にとって作家イコール変態であるらしく意識的にかかわりを避けているふしがあった。私は、煙草を灰皿に置くなり彼の目をしっかりと見た。彼は威圧されたのか目をそらした。私は、その瞬間に彼は賞を獲れないと確信した。「はっきり言って筆力は認めますが、作品から放たれる熱が薄いように感じました。これまで何度か文学界の二次まで行かれたそうですが、私が思うにそのことが飛躍の芽をつみとっていると思います。」「それはどういうことですか?」彼の表情に色がでてきた。中上健次も身をのりだしてきた。私は、彼がいきなり殴ってきてもよけられる距離を確認しながら言葉をつないだ。「書く作業は誰でも辛いものです。楽しいと思うことなど皆無です。書きあげる作品をどのレベルまでもっていくのか。それが新人の斗いだと思います。しかし、あなたは書きあげたとき、まあ、一次は行くだろうと安心していませんか。私もそんな経験はあります。ですが、もう一段登るためには、もっとバーを上げてみようという挑戦が必要です。それを失っては、からが破れないと思います。私は中上健次に読んでもらえると思ったときから確実にレベルがあがりました。失礼ですが、あなたの作品は以前のものと今回はあまり変化がないのではありませんか」彼の表情から勢いが失せていた。私は、漠然と想像していたことが彼と話をしていて現実のものになったと思った。

多分、仲間うちで彼は抜きんでている存在であろう。文学界二次として名前が公表される訳であるから誰もその実力を否定できない。そして、彼の胸にも自信と誇りが生じることになり、書きながら選者を意識したこともあっただろう。そのおごりが、作品に住みつかなくてはならない書き手の熱を追い出している。気がつくと私は中上健次に制止されるまでそのような趣旨を喋りつづけていた。「まあ、こいつの言うことも一理はあるが、また書くことだな」結局彼は私の感想を聞かされただけで席を立ってしまった。そして、それ以降顔を出すこともなく、投稿の形跡もなかった。

選評

なぜ、このようなエピソードを持ち出したかと言えば、今回で十一回目となる銀華文学賞の応募作品にあの時の彼と同じような状態で書きあげたであろうと推測される作品が幾つかあったからである。作品は書き手の意識でしか書けないのは当然であるが、最高のレベルのものを書こうと目標を決めれば飛躍的にのびると思ったのは「封鎖海峡」「クーデター」「ワンタンうどんはソマリヤレシピ「首輪」「ガラスの檻」であった。素材の良さを活かしきれていないのが非常に残念だった。視点を変えたり、構成に時間をかけたりすればどれもが当選圏内に入れたのにと悔やむ。「封鎖海峡」の歴史的背景の重さ、嵐にほんろうされる船の描写には圧倒されたが、全体をつらぬく主旋律が聞こえてこなかったのが淋しかった。

「クーデター」は海外の経済援助を巡るトラブルを基調にしていて作品の底流に見えるテーマの重さは理解できるのであるが、作者の息づかいを感じることができなかった。「ワンタンうどん……」は海外に日本のうどん屋を展開する話で、これも「クーデター」同様に国の違いを見せつけてはくれるが、話の軽快なテンポをテーマへとうまく結びつけられなかった。しかし心に残る作品である。

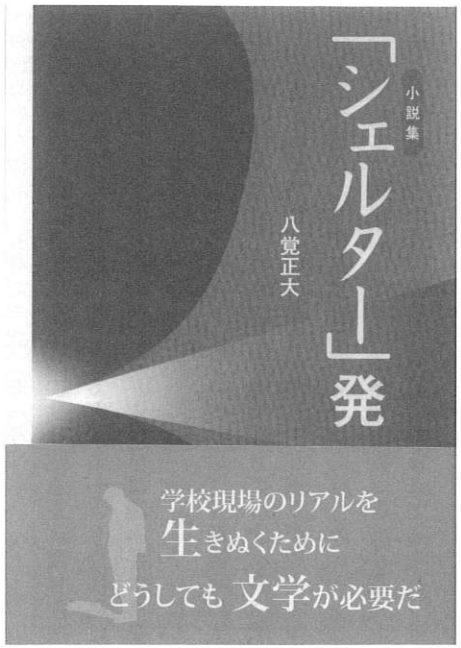
「首輪」は愛犬のダン吉が戦争末期にいなくなった謎を追いかけていく話である。私も似たような体験があるので他人事には思えず引き込まれて読んだ。構成をもう少し考慮すれば良質な作品に変身できたであろう。

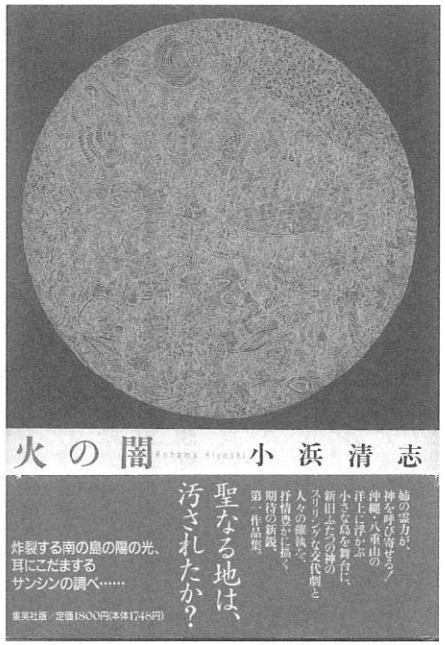
「ガラスの檻」は戦争という怪物に食い荒らされた日中関係を取材という形で作品にしているが、このような作品は巷にあふれていて切り口の斬新さがなければ読み手はあまり感動しないであろう。

さて、当選作となった「アクリル板」は、死刑囚との交流を描いた人間の悲しみが文面からあふれていた。主人公の生活を入れていればなお濃度が増したと思うが、この作者はもっと書ける人だと信じる。

「天空に打つ」は私はノンフィクションだとして小説としての点数は低かったが、良質な作品であることに変わりはない。この作者は冒頭に書いた彼と同じくどこかで見切りをつけているような気がする。もっと力の出せる人である。このレベルで満足せずに書いて欲しいし、書ける人である。銀華文学賞出身の作者はプロの作者になれると期待している。今年も数多くの作品に触れさせて頂いたが、文学の勢いは少しもおとろえていないし、その潮流はますます広がっていくであろう。

選考会風景





文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト・漫画賞・まほろば賞

授賞式&祝賀会・懇親会

読者の皆様、今年も「文芸思潮」銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞・イラスト漫画賞・まほろば賞の授賞式および祝賀会・懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できる楽しい文学の集いです。創作への熱い思いを交わし合いましょう。どうぞご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時●平成二十七年二月十五日（日）
授賞式午後二時／祝賀会・懇親会五時半

会場●東京都大田区民プラザ地下小ホール
東京都大田区下丸子三・一・三
TEL03・3750・1611
※東急・多摩川線「下丸子」駅前

会費・飲食費●授賞式無料、祝賀会一人五千円

問合せ・予約申込●アジア文化社・文芸思潮
TEL〇三・五七〇六・七八四七五十嵐まで
または090-8171-9771まで

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博
おおたか　まさひろ

1954石川県生まれ　日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

都築隆広
つづき　たかひろ

1978山梨県生まれ　東海大文学部卒
2000「看板屋の恋」で第91回文學界新人賞受賞「狼を見る」（「文芸思潮」）「ハンコの町の鰻がいる家」（「三田文学」）他
短編映画「ウミスズめし」脚本（吉本興業・宮崎県門川町製作）他、放送作家としても活動中

作家集団「塊」新メンバー募集中

八覚正大
はっかく　まさひろ

1952東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
91「十二階」で新潮新人賞受賞　文藝学校・NHK学園講師　主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

小浜清志
こはま　きよし

1950沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉
いがらし　つとむ

1949山梨県生まれ　早大文芸科卒
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90タイ在住、カンボジア問題を取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ』

銀華文学賞優秀賞

クーデター

六藍光洋

ニジェールは初めてだった。今回、この国での無償援助は小学校を二〇校建設すること。

チームの構成員は、文部省の下級役人、ＪＩＣＡ（国際協力機構）の委託を受けたコンサルタント会社ＩＳＮのリーダーと五人の社員、それに通訳の早坂の八人だった。

毎年、政府は、開発途上国の援助を目的としたＯＤＡ（経済開発援助、無償援助もこれに含まれる）の予算を計上する。それを外務省の経済協力課の担当者が、援助を求める国から提出されてくる要請の中から、そのサイズと、かかるコストと、緊急性などを勘案して、援助プロジェクトに仕立てる。それが出来ると、援助プロジェクトの実施を請け負うＪＩＣＡにそれがなし得るものかどうかを調べさせる。結果が肯定的ならば、ＪＩＣＡは自分の許に登録させているコンサルタント会社から、その専門、プロジェクトの規模に対応できる能力を備えている一社を選び、プロジェクトの詳細を決定するために、現地へ派遣して、《基本設計調査》を実施させる。次に、《基本設計調査》の結果に基づいて、ＪＩＣＡは施工業者を入札で選ぶ。入札者は日本国籍の企業に限る。

早坂たちがニジェールへやってきたのは、この《基本設計調査》を行うためにであった。

ニアメ（ニジェールの首都）へ近づくにつれて、上空からの目に真っ先に飛び込んできたのは、地平線から地平線へと蛇行している赤い帯であった。これは西アフリカ最大のニジェール河で、その流れに沿った両側には、色鮮やかなグリーンのベルトが続いている。さらにその外側には、対照的に無機質な灰白色の原が果てしもなく広がっている。

翌朝、調査団は教育省に赴き、教育大臣を表敬訪問した。大臣室へ入って行くと、大臣が執務机から立ち上がってみんなを迎えた。小柄だが、目が鋭く、精悍な顔つきをしたまだ若い男だった。

握手を交わした後、彼は一同を会議用のテーブルへ誘った。ニジェール側からは、彼のほかに、初等教育局長と、調査団に随行してコーディネーターを務める省員が同席した。

まず大臣が口火を切って、調査団への歓迎と、援助してくれる日本政府への謝辞を述べた、続いて文部省の役人が、今度の援助のスコープとその内容を説明した。

役人の説明が終わるのを待ちかねたように、大臣がすかさず口を開いた。

「我々が要請したのは五〇校ですよ。たったの二〇校というのは、一体全体、どういうことなんですか？日本政府は、我々がどんな苦境にあるか理解してくれてないみたいですね」彼は噛み付かんばかりに言った。

「そうおっしゃられても、我々の方にも予算の枠がありますんで」文部省の役人はたじたじとなって、絞り出すような声で応じた。

「予算って、一体、どれくらいの額なんですか？」

「それはこの計画書の五ページに書いてあります」

大臣は、言われた五ページを開いて、プロジェクトのコストの総額を探した。

「一億円か。一億円ってのは、どのくらいになるんだ、局長？」

円など聞いたこともない大臣は、一億円がどれほどの価値なのか分らなかった。

「およそ、一四〇万フランです」聞かれて、局長は即座に答えた。

「何、一四〇万フランだって！一校あたり七万フランってことか。それだけの金があれば、我々ならばその一〇倍の校舎を建てることができますよ。どうして、日本政府は我々に金を渡して、作らせてくれないんです？」大臣は憤った。

日本の無償援助では、相手国へ現金を渡さない。現物支給が原則なのである。

「それが、日本の無償援助のシステムだからです」

「我々がもらった金なのに、我々が自由に使えないだなんて。これはまやかし以外の何ものでもない」大臣は息巻いた。

確かに、この仕組みには正当な理由とまやかしとがあるのを、早坂も認めていた。

正当な理由はこうだ。相手国へ援助の金を直接渡した場合、それが援助の目的通りに使われず、別の目的、たとえば軍備の増強などに使われてしまう恐れがある。あるいは、全く援助の目的には使われず、国のトップがそっくり着服してしまうことだってある。

では、まやかしの方はどうか？　すでに述べたことだが、プロジェクトの工事を施工するゼネコンは入札で決められる。入札参加できるのは、日本国籍の企業だけに限られる。その理由は、日本が金を出す援助なのに、外国企業に儲けさせるいわれはない、というもの。この理由には誰もが納得する。ところが、裏を返せば、外国企業に儲けさせないという理由が、実は日本企業を儲けさせる、という理由にもなっているのである。

言うまでもなく、政府の援助の金は国民の税金から拠出されている。その金はどこへ行くのか？　工事を落札したゼネコンへ、である。そこまでは問題がない。問題は工事のコストである。これが法外に高い。ではコストはなぜ高くなるのか？一つは、援助にぶら下がっている族議員の取り分が含まれているから、である。議員たちは、いろいろな情報を集め、現地のコネを活用して、プロジェクトを仕込む。そして、議員の圧力を掛けて予算の付くプロジェクトに仕上げる。その後で、ゼネコンからキャッシュ・バックを受ける。

さらにコストが高くつくもう一つの理由は、人も資機材も全て日本のものを使うことにある。一般に、日本の人件費や資機材は他所より高い。それに人間の場合は、給料プラス渡航費プラス滞在費がかかるし、資機材の場合は国内価格プラス輸送費がかかる（この稿の時代以降は、現地や第三国からの調達も、一部認められるようなったようである）。その上にゼネコン同士が予め談合して、順繰りに落札できるように決めているので、業者間でのコスト競争がない。コストは、政府が決めた予算枠いっぱいにつければよい。その予算枠は、いろいろな理由をつけて尋常では考えらないほど高く設定されている。つまり、無償の仕事は業者にとって、税金を使ってしこたま儲けられる、堪えられない美味しい仕事なのだ。

「では、日本はどうしても、計画を見直してくれないんですか？」大臣は、少し態度を和らげて言った。

「それはできません」

「こんなにお願いしても？」

「無理です。もし我々の援助の仕組みを承服いただけないなら、要請を取り下げてください」

それを聞いて、早坂は一瞬息を飲んだ。

彼の頭には、反射的に、かつて起こった一シーンが浮かんだからである。それは、アフリカの別の国での、村落給水プロジェクトにおいて、であった。相手国は、深井戸につけるポンプを日本製の手押し式のものではなく、オランダ製のハンドル式のものにして欲しいと言った。ところが、日本の厚生省の役人は、日本の援助では日本製のものしか使えないの一点張りで、相手国の要請を却下した。相手国の人たちは憤慨し、援助を受けるのを拒否した。自分たちが使用するのに、好きなものを選べない援助など要らない、と言って。

これは、一大事であった。何が一大事かと言えば、相手国の援助拒否という外交上の問題としてではなく、このプロジェクト仕込んだ議員先生の面子を潰したからである。予算がすでに付いてしまっているので、この援助は執行されなければならなかった。そこで、政府はしばらく冷却期間を置いた、相手国の求めるオランダ製のポンプを使うことで決着をつけた。哀れ、無償援助のルールを忠実に守ろうとして問題を起こした当の役人が、その後どうなったかを早坂は知る由もなかったが……。

自分が言ったことを訳さないままでいる早坂を見て、文部省の役人は、

「君、何してるんだ。ちゃんと通訳してくれなきゃ駄目じゃないか。大事なことなんだから」といらいらしながら催促した。

大臣は早坂の訳を聞くと、馬鹿にするようにニヤリと笑っただけだった。それから不意に立ち上がり、自分の机から分厚いファイルを取り上げて、言った。

「私はこれから閣議に出なきゃならない。日本側の意図は大統領に伝えておきます。もし、彼に異存がなければ、あなた方の思い通りにやって下さって結構です」

そう言い残して、日本人とは握手もせずに、部屋を出て行った。

その日の午後、調査団は、今度は、フランス大使館の経済協力課へ、挨拶に行った。

歴史的に、ニジェールは一九六〇年に共和国として独立するまで、一世紀にわたって全土をフランスに領有されていた。独立後も、フランスはこの国を隠然と支配し続けている。

フランス大使館は、大統領府のすぐ側にあった。いつでも、好きなときに大統領の喉元を扼することができるほどの距離に、である。これは、露骨にニジェールとフランスの関係を示している。

経協課のトップは、マダム・ベルナールと言った。マダムと聞いていたので、熟年の女性を想像していたが、早坂たちを迎えたのは、まだおぼこさが残る、初々しくてチャーミングな女性であった。その上、彼女の装いがまた、大

使館という場所にはそぐわない、型破りなものであった。胸に《Corporation Française（フランセーズ）（フランス協力）》というロゴ入りのTシャツを着、ジーンズを穿き、現地の革編みサンダルを履いていた。

「私が経協担当のベルナールです。本日は当課にお越し頂き、光栄に存じます」

若さに似合わず如才なく言って、彼女は早坂たちをソファーへ導いた。

「それで、本日は、どんなご用件で？」

「はい、この度、小学校建設援助でこちらへ参りました。本日伺いましたのは、そのことをお耳に入れておきたいと存じたからでして。これが我々の計画書です」

団長は、今朝方教育大臣や教育省に渡した計画書のコピーを、彼女の前に置いた。

マダムはそれを手にとって、儀礼的にパラパラとページを繰った。

「立派な計画ですわね。後ほどじっくりと拝見させて頂きますわ」

そう言って、彼女は計画書を閉じ、自分のデスクの上に置いた。

「ところで、みなさんは、もう、この国へいらっしゃったことがおありなんですか？」

プロトコールが終わると、マダムは、表情を和らげて聞いた。

「いいえ。今回が初めてです」団長が答えた。

「それでは、どんな印象をお持ちになられたか、伺いたいものですわ」

誰も答える素振りを見せなかったので、早坂が代表して答えた。

「空港の外へ出て驚きました。なんて清潔な国なんだろう、って。だって、ごみ一つ落ちていないじゃありませんか。だから、ニジェール人は、特別きれい好きな人たちに違いない。ニアメに着くまで、ずっとそう考えていました」

「で、なぜごみが落ちていないか、お分かりになられましたか？」彼女は興味深そうに尋ねた。

「はい。街へ入って、通りを歩く人たちを見て分かりました。ごみがないのはニジェール人がきれい好きだからじゃなく、棄てるごみも持っていないからなんだ、って」

「大正解です。国連の経済調査では、ニジェールは世界ワースト2の最貧国です。国民大半の収入は、一日一ドルに達しません」そう言うマダムの顔は曇った。

「大戦の後、アフリカ諸国はこぞって独立しました。ニジェールも例外ではありません。一九六〇年にフランスから独立しています。ところが、独立というのは、彼らにとってあまりにも大きな価値の転換だったので、いまだに消化しきれずに、戸惑ったままなのです。大半は先進国の真似

をして変わろうとしましたが、その試みはことごとく失敗しました。だって、そうでしょう。ただ外見の真似だけだったんですから。土台まで変わったわけじゃありません。土台は元のまま、アフリカ固有の部族社会で、国家観なんてものはありませんでした。それでも、これは外側からの強要によって変えられるものではなく、彼ら自身が気付いて自ら変えるしかないんです。それで、我々は、今、それをじっと見守っているところなんです」

「でも、このままじゃ、アフリカはますます世界から取り残されてしまうじゃありませんか？」

「おっしゃる通りです。でも、そうする以外にどうすべきか、何か良い考えがおありですか？」

マダムにそう詰め寄られると、早坂は答えに窮した。

「見守っているだけよりも、何とか彼らを助けてやる方が先だ、ってことは？」

「助けるというのは、無償援助のことですね？　でも、ご存知でしょうが、無償援助ってのは、どれもこれも紐つきじゃありません？　援助を口実に、被援助国の資源や、マーケットや、軍事拠点を手に入れようと狙っているんですから。それは、過去において、我々がしてきたことと同じです」

マダムの発言は、経協担当責任者の発言としては不穏当なもののように響いた。でも、フランスでは、これくらいの個人的逸脱は許されるのだろうか、と早坂は感嘆した。

「つまり、無償援助は新植民地主義（ネオコロニアリズム）を行う手口の一つだ、とおっしゃりたいんですね？」早坂もマダムに挑発されて、日本社会では絶対に口にできないことを、口にした。

「断定はしませんが、結果的にはそういうことになりますわね」マダムは平然と答えた。

「おい、もうお暇しようや。これ以上長居して、マダムにご迷惑をかけちゃ悪いから」

このとき、自分が蚊帳の外に置かれるのが気に入らなかった団長が、二人の中に割って入った。

詳細設計をする前に、調査団は、この国の学校事情を見ておきたかった。そこで、ニアメ近くの小学学校と、住民が自力で建てているという現場を見ることにした。

彼らの視察には、ムンバイが案内役を務めた。彼は、コート・ジボワールのアビジャン大学で、教育学を学んだ。二八歳の独身、陽気で、団員の受けも良い青年だった。

最初の学校は、ニアメ東の場末で、地区の広場の一角にあった。それは、四隅に立てた木の柱の上に古びたトタンを載せて屋根とし、周りを収穫した後のキビの軸を編んで作った簀（す）の子で囲っただけのものだった。

一行が訪れたときは、授業中だった。突然、知らない日本人がどやどやと押しかけてきたので、先生も生徒たちも仰天した。先生はムンバイと同じ年恰好、生徒たちはまちまちで六歳から一〇歳の間くらいと見られた。生徒数は四〇人ほど、中は一杯で、そのうち三分の二が男の子だった。

学校には机も椅子もなかった。あったのは傷だらけの黒板だけ。それが柱の一本に立てかけられていた。生徒たちは土の上に直に座るか、木を輪切りにしたものを持ってきて、それを椅子代わりにして座っていた。教科書も他の教材も一切なかった。

生徒たちは、ノートも鉛筆も持っていなかった。ノートや鉛筆の代わりに、日本ではまったく見かけなくなった石版と蝋石を使っていた。

そのとき彼らが習っていたのは、フランス語だった。先生がチョークで黒板へ書いたものを石版へ書き写して、それを何度も声に出して繰り返して唱和していた。

日本人を案内してきたことを誇らしげにしながら、ムンバイがこれらの《Messieurs（メッシュー）（方々）》は、ニジェールの学校を建てるために来て下さったのだ、とみんなに紹介した。

すると生徒たちは大歓声を上げて喜んだ。そして、手を叩きながら、

《Merci Messeurs（メルシー メッシュー）, Merci Japonais（メルシー ジャポネ）（ありがとう、皆さん。ありがとう、日本の方々）》と囃し立てた。

「政府が識字率五〇パーセントの目標を掲げてから、生徒の数は年々増えてきました。ここでも生徒数が多くなりすぎて、一度に全員を教えることができません。それで、午前と午後に分けて、二部制で教えています」と、先生は興奮気味に語った。

「みんなが教育の大切さを認識するようになってきたのは、良いことです。ですが、まだ、全員が教育を受けられる環境は整っておりません。何よりも圧倒的に学校数が足りないからです」

「だから、我々も、協力するために、こうしてここに来てるんだがねえ」団長は、嫌味に、上から目線で言った。

「それには感謝しております。それで、建設していただくのはいつなんでしょうか？」

「来年の三月までにはできてるよ」

三月末は今期の会計年度末である。予算は単年度制なので、翌年まで持ち越せない。

「本当ですか。そりゃすごい。まるで夢のようだ」

先生は小躍りして喜んだ。生徒たちの喜びも弾けた。彼らは再び《Merci Messeurs（メルシー メッシュー）, Merci Japonais（メルシー ジャポネ）》を大合唱して、その場はお祭り騒ぎになった。

次の視察は、住民が独力で学校を建てようとしている現

場であった。ニアメのど真ん中、スーク（バザール）地区で、そこは買い物客でごった返していた。

建物はまだ人の背丈ほどの高さにまでしか出来上がっていなかった。工法は、日干しレンガを積み重ねていく伝統的なもの。それでもレンガとレンガの隙間にはコンクリートをつめて塞いでいた。窓も切ってあり、その框にもコンクリートが塗られていた。ただ、その乾いた場所を手で触れると、パラパラと剥がれ落ちた。明らかに粘度が不足している。砂に混ぜたセメントの量が十分ではないせいだ。

それを指摘されると、工事責任者は、資金が足りないので十分にセメントが買えないからだ、と言い訳した。

一体、誰が資金を出しているのだろうか？　スークのオーナーたちだ、と言う。彼らは自分たちの子供にちゃんとした教育を施して、立派な親方（パトロン）に育てたいと願っている。

ところが、最近、彼らの熱はすっかり冷めて、初めほど寄付が集まらなくなった。そこで、資金がなくなると工事を中断して、金が集まるまで待つ。そんなことを繰り返して、なんとかここまで辿り着いた。計画では、この先、まだ屋根も葺き、教材も購入するという。ただ、完成はいつになるかわからない。それでも、いつか出来上がれば、それで良い。時間は十分ある。単年度制を旨とする日本人には考えられない悠長さだ。これこそまさしく《This is Africa》なのだろう。

ニジェールは、日本の援助を受ける前に、すでに世界銀行から五〇校を提供されていた。それが、日本へ要請した五〇校の数の根拠になっていたのかも知れなかった。調査団は、その学校も見てみたいと思った。

ムンバイが案内したのは。ニアメの官庁街の一角にある大きな広場であった。そこには旧校舎の横に、新しい三棟の建物があり、ムンバイはそれが世銀の建てた校舎だと言った。

「どうです。立派な校舎でしょう？」自慢げに言って、ムンバイは調査団の反応を待った。

「確かに」コンサルタント会社、ＩＮＳのリーダーが答えた。

「だが、この校舎は長く持ちそうもないよ。ここを見たまえ」

リーダーは校舎の基礎部分を指差して言った。その基礎は、地面の上にコンクリートをべた打ちしただけのものである。そのせいで、基礎の下の土が雨水で流され、すきすきになっている箇所がいくつか目に付いた。

「これじゃ基礎の役目を果たしていない。このままだと建物が傾いでしまう。ほら、もう壁にひびが入ってるだろう。これは建物が歪みだしている証拠だよ」

「本当だ。でもニジェールじゃ、これは普通にやられてる工法なんですがねえ」ムンバイは表情を暗くした。

「だが、心配はいらんよ。俺たちの建てる学校は、一〇〇年たってもびくともすることはないから」
リーダーは自信たっぷりに言った。

翌日から現地調査が始まった。作業は主に測定だった。使用するのは、土地の高低を測るためのトランシットと標尺、それに巻尺という、至って簡単な道具ばかりである。だがサイトは政府が摂取して建設予定地にしたものであったから、更地ばかりではなく、まだ建物があったり、ごみの山が置かれていたり、木が立っていたりした。それらを越えて測量するのは、かなり骨が折れた。

午後には外気温が四〇度を越すので、健康上の配慮から、外での作業は午前中だけに限った。全体の作業スケジュールに鑑みて、一日の調査も二サイトと決めた。

俺はどこにいるのだろうか、と早坂は自問した。ビヤホールなのか？　彼の周りにはジョッキーを手にした人たちが、大声で喋っていた。

気が付くと、目の前に、近藤が座っていた。

「あれ、近藤やないか？」

「そうや、俺や。久しぶりやなあ、早坂」近藤は懐かしそうに、早坂に笑った。

近藤とは高校の同級生だった。二人ともラグビー部で、花園を目指して猛練習をした。

高校を終わると、近藤は地元大学の医学部に進み、早坂は外交官を目指して東京の大学へ入ったので、二人は西と東に別れ別れになった。

その後、近藤は開業医だった父の医院をついで、街医者になった。

一方、早坂は、外交官試験に失敗した。失敗した原因が、自分の専門としたフランス語力の不足にあったことを覚った彼は、フランス語を徹底的にやり直すつもりでフランスへ渡った。

ところが、パリで遊惰な生活に染まった早坂は、外交官になることをあっさり諦めてしまった。そして、竜宮上へ上がった浦島太郎よろしく、おもしろおかしく一〇年を浪費してしまった。

早坂が日本へ帰ってきたのは、滞在ビザの延長が難しくなったからである。

その頃、日本は、開発途上国の援助に熱を入れ始めていた。その最大の理由は、国連安全保障理事会で常任理事国になるために、被援助国から一票を貰うことにあった。

早坂はフランス語が専門だったので、西アフリカのフランス語圏での援助プロジェクトに、通訳としての職を得た。

「何で、お前がここにおんのや？」

近藤とはフランスへ行く前にあったきりで、あれからも

う二〇年も会っていない。

「何でって、お前がここへ来い言うて呼んだからやろう」

近藤は不服そうに言った。

そう言われて、早坂は自分の行動に自信が持てなくなった。彼には、近藤を呼び出した記憶が、全くなかったからだ。

「いつ、日本へ帰って来たんや？」早坂がぼんやりしているので、近藤が尋ねた。

「もう、五年くらいになるなあ」

「ふーん。それで、今、何しとんのや？」

早坂は、政府の無償援助に携わって通訳として、アフリカへ行っていることを話した。

「アフリカか。俺には想像もつかへん世界や。ちょっぴり興味はあるけどなあ」近藤は感心したように言った。

「ちょうどええ。前から気になとったことがあるんや」近藤は改まった顔になった。

「聞くけど、お前のしとる援助やけどなあ、ほんまに相手のためになっとんのか？」

藪から棒に何を言い出すのだ、と早坂は面食らった。

「ためになっとんに決まっとるやないか。向こうが頼んで来よるんやさかいなあ」

「お前がそう思うとるだけとちゃうんか？　俺には納得でけへんけど」

早坂には、近藤が何を言いたいのか想像がつかなかった。

「困っとる者を助けるのが援助やないか。俺が行っとるアフリカは、日本と桁違いに貧しいとこや。その貧しさは自分たちだけではどないもでけへんもんや。そやから、彼らより豊かな俺たちに援助を求めて来よるんや。アフリカ人も日本人も、今、この地球を共有しとる仲間なんやで。知らん顔しとるわけにはいかんやろ？」早坂はだんだん熱くなってきた。

「お前の言うことは、完全に正しい思うで。そやから、反対はせえへん。反対はせえへんけど、それでも引っかかるもんがあるんやなあ」

「困っ取る者を助けとるだけのこっちゃないか。お前にはそんな単純なことが分からへんのか？」

「それは分かっとるわ。俺が分からんのは別のこっちゃ。第一、困っとる者を全部助けられるんか、いうこと。第二に、一度助けた者を最後まで助け続けられるんか、いうこっちゃ。最初の方は絶対に無理や。後の方は、まあ、ほとんど無理やろう。そこで問題が起こる。助けられた者は、助けられたことによって反って不幸になる、いう問題がなあ」

近藤は自分の考えを噛み締めるように言った。

「アホなこと言うな。助けられたのに、何で不幸になるんや？」

そう言ったが、早坂は、近藤の言うことが援助の核心を衝いていることに気が付いた。

「俺は医者やさかいに、医者の立場で言わしてもらう。今、目の前に、栄養失調で、重い病気に罹った子供がいたとする。見殺しにはできへん。そこで、現地へ行っとる医者やユニセフのスタッフが、協力してこの子の命を救うた。医者も、ユニセフのスタッフも、特に子供の両親は大喜びするやろう。そやけど、話はそれでお終いやない。その子には、その先、まだ長い人生が待っとるさかいになあ。アフリカの慢性的な飢餓の中を、この子はどないして生き延びて行くんやろう？　生き延びられたとしても、その後で人間らしい生活ができるんやろか？　その保証がない限り、助けられた子供は幸せになられへんのと違うか？　そやけど、今の援助はそこまでしよらん。その結果、命を助けられはしたものの、その子はその先ずっと、苦しまにゃならん……」

今の援助の現状を冷静に見つめれば、近藤の言うことは正鵠を得ている。だが、援助に携わる者として、早坂は、彼の言い分をそのまま認めてしまうわけにはいかなかった。

「ほなら、お前はその子を見殺しにせえ言うんか？」早坂は感情的に逆襲した。

「いいや、そこまでは言うとらん。実際、その現場におったら、俺かてその子を助けとるやろう。後先のことも考えんとなあ」

「それやったら、同じこっちゃないか。困っとる者を助けるんやさかい」

「そこが、ちょっと違うんや。お前は無条件で助けるやろ。そやけど、俺は、ほんまは助けん方が良えんやないか、と思いながら助ける」

「それでも助けんのやろう？　それやったら同じこっちゃ」

「いや、違う。考え方のベースがなあ」

「考え方のベース？」

「そうや、考え方のベースや。俺のベースは自然の法則や。自然の法則いうんは、自然淘汰のこっちゃ。人間以外の生物では、それがちゃんと守られとる。守っとらんのは人間だけや。理由は、人間が、ヒューマニズムや医学の進歩や言うて、この法則を無視しとるからや。その間に人間の数はどんどん増えて行く。それも貧しい国ほど人口が増えとる。そして、国連の食料援助を見ても分かる通り、いわゆる豊かやと言われる国の人たちが彼らの命を支える構図になっとる。そやけど、そんなことがいつまで続くと思うんや？　いつかパンクするで。そのときになって援助を止める言われたら、それまで援助に頼って生きとった人間はどないなってしまうか？　悲劇に陥るだけや。そうなることが分かっとったら、初めから援助なんかせん方がええんとちゃうか？」

「自然淘汰やなんて、そんな無茶苦茶なことがあるか。どんな人間にかて、生きる権利はあるんやで」

「ほんなら、お前は自然淘汰を人間には適用せへん言うんやな？　それは、自然の摂理に叛くこととちゃうんか？」

この論争に勝ち目がないことは、早坂にも分かっていた。だが、このまま何もポイントも上げないで、引き下がるのは口惜しかった。何とか一矢だけでも報いなければ……。

「お前は日本にいて命を脅かされる心配がないから、気楽に自然淘汰やなんて言うとられるんや。せやけど、現地で命を危険にさらされとる者たちに、自然淘汰の理屈は通用せえへん。どんなことをしても、生き残ることしか考えへんからなあ。そやから、俺たちの助けが必要なんや」

それを聞いて、近藤が嘲るように笑ったように見えた。するとなぜかその顔が大きく歪んで、その下から教育相の顔が現れた。

「そうだ、我々は援助を必要としてる。自然淘汰なんて糞食らえだ」大きく目を剥いて、彼は叫んだ。その剣幕に早坂はたじたじとなった。

そのまま、大臣は早坂に向かって突進して来た。彼は、伸び上がりお化けのように巨大に膨れ上がり、早坂を押し潰しかけた。

「我々は貧しいんだ。貧しくしたんはどこのどいつだ。植民地にして我々から全てを収奪した、お前たちではないのか。おかげで我々は独り立ちできなくなってしまった。我々は奪われたものを返してくれといってるだけだ。我々にはそうする権利がある。そうじゃないのか？　公平であるためには、世界はもっともっと我々を助けるべきだ……」大臣は、早坂に掴みかからんばかりにして、怒鳴った。

「助けてくれ！そんなことを言われても、通訳の俺にはどうすることもできないよ」

早坂は、必死で哀願する自分の声で、目が覚めた。

あくる朝、食事をしにレストランへ行った早坂は、人目を引く三人の新入り客に目を止めた。

他の客たちはたいがい顔見知りか新入りでも至って控え目であったのに、その三人は全く違っていた。男が二人と女が一人で、三人ともアフリカには不似合いな黒いビジネススーツを纏い、男は明るい色のネクタイを締め、女は赤い模様のスカーフを首に巻いていた。

年嵩の女がボスのようで、若い男二人を仕切っていた。彼らは周囲にはばかることもなく、声高に巻き舌のアメリカ英語を喋り、我がもの顔に振舞っていた。

朝食のあと現場に出た早坂はムンバイに、レストランで見かけた三人組は何者かと尋ねた。

「ああ、あの三人ですか？あれはＩＭＦ（国際通貨基金）から送られて来た、調査員ですよ」

「何で、ＩＭＦの調査員がここにいるんだい？」

「恥ずかしい話ですが、いまニジェールの国庫は空っぽなんです。このままじゃ。国は破産してしまいます。そこでＩＭＦへ融資を仰ごうとしてるんです」
「ＩＭＦが、無条件で融資してくれるとは思えないがねえ……」
「もちろん、融資条件（コンディショナリティ）はあります」
そう言って、ムンバイはＩＭＦの融資条件について話した。
その一、歳費の削減。これには二つの側面がある。一つは、大統領とその側近たちによる国費の着服をやめること。もう一つは、《ユーレイ職員》（職員の半分がユーレイである）を失くすこと。ユーレイ職員というのは名前だけは在籍していて、仕事に出て来ない者たちのことである。それでいて、給料はちゃんと受け取っている。
その二、市場の開放。これは関税撤廃のこと。もともと、国際競争力の弱い国内産業が、致命的なダメージを蒙ることは必至である。
その三、食料自給率を一〇年後までに二倍にすること。今でさえ、砂漠化が進んで耕地が激減しているというのに、この条件は現実に逆行するもので、とうてい履行できない。
「ＩＭＦは、本気でニジェールを助けようとしているとはとうてい思えません。当面、融資というカンフル剤を打って、この国に何の援助もしなかったという、国際社会の非難をかわそうとしているだけなんです。もともと、彼らにとって、ニジェールは何のメリットもない国なんですから」ムンバイは歯軋りしながら言った。
早坂は呆然となったまま思案をしていたが、そのときたまたま心に浮かんだ質問をぶつけて見た。
「もし君が大統領だったら、この国をどうしたいかね？」
ムンバイは驚いた顔をして早坂を見つめた。だがすぐに毅然とした態度になって、
「そうですね、僕が大統領だったら、ＩＭＦなんかから、絶対に融資を受けない国にしたいですよ」と答えた。
日本チームのニジェールでの調査も終盤に差しかかっていた。
フィールドワークを終わる日がやってきたが、チームリーダーはムンバイの協力に謝することは何もしなかった。そこで、早坂が、個人的に彼をホテルのディナーに招待した。
言葉が通じることもあって、仕事を通じて、二人は無二の親友になっていた。
食事の間の歓談の途中で、突然ムンバイは言葉を改めて早坂に言った。
「この前、ムッシュー・ハヤサカに聞かれたことをずっと考えていました。もし僕が大統領だったらどんな国にしたいか……ってやつをです」
「それで、答は見つかったのかい？」
「ええ見つかりました。答は、日本みたいな国にしたい、です」
「おいおい、君は俺に気に入られようとして、そんなことを言ってるんじゃないだろうな？」
「とんでもない。そんないい加減な気持ちじゃありません。僕は日本こそが、我々が手本にすべき国だと、本気で考えているんです」ムンバイは真剣な顔をして返した。
「日本のどこを手本にしたいんだね？」
「復元力です」
「復元力、だって？」早坂は、彼の意外な言葉に幻惑された。
「失礼ですが、日本は極東にある小さな島国です。つい最近まで、世界でその存在さえも知られていませんでした。ところが、いつの間にか、日本は大国アメリカと戦えるまでの力を身に付けていました。残念ながら、結果的には物量に勝るアメリカに勝てませんでしたがね。そのとき、原爆を二発も落とされて、木っ端微塵にされたと聞いています。ところが、半世紀もたたないうちに、立派に復興したのです。それも、アメリカに次ぐ世界第二の経済大国として。世界は《日本の奇跡（ミラークル・デュ・ジャポン）》といって、驚愕しています。我々も同じ人間です。あなたたちにできたことが、どうしてできないことがありましょう？」ムンバイは意気軒昂として言った。
「君の言う通りだ。君たちにだってできないことはない」
早坂は肯定した。「だが、そのためには克服しなければならないベーシックな課題があるがねえ」
「何ですか、そのベーシックな課題、ってのは？」
「国民の団結だよ。俺が見たところじゃ君たちにはそれがない。日本人は単一民族で言語も一つだから、団結するのは簡単だった。ところが、この国じゃ部族が多い上に、使う言語も部族によってまちまちだ。国民同士の意思疎通さえまともにできない。この状態のままじゃ、国民の団結は容易じゃない。団結できなきゃ、国を興すという目標も達成し難くなる。どうだ、団結できそうかな？」
「できると思います。若い世代に団結の精神を植え付けるのです。それには教育しかない。でも、それは我々の力だけでは担えません。ですから日本にも協力をお願いしてるんです」
「君はクレバーな人間だから、事のついでにもう一つ教えておこう。日本が成功した秘訣は、外から取り入れた知識をちゃんと消化し、自分の血や肉に変えることができたからだ。そのためには、ただの物真似だけじゃ足りない。それを自分流に焼き直して、理解しなければならない。そのとき、全く新しい考えが湧いてくるんだよ。それを生かして使う。そうでなければ、君たちも日本人みたいに成功は

できないだろう」
「それは何よりも難しい。我々は自分で考えるってことができない人間たちなんです」ムンバイは悲痛な声を上げた。
「何だって！　自分で考えることが出来ないってのは、どういうことなんだ？」
「みんなフランス人のせいです。一〇〇年にわたる植民地支配の間に、彼らは我々から考える能力まで奪っちまったんです」
　そんな馬鹿なことがあるだろうか？　考える力まで奪ってしまう、だなんて！
「すまん。君の言うことがよく分からん。悪いがどういうことか説明してくれないか？」
「分かりました。考えるのには考える必要があるからでしょう。我々が考えられなくなったのは、フランス人が考える必要を全部取り上げてしまったからです。行政は、彼らの本国の制度をそのまま移行しました。法律も、フランスの法律が適用されました。経済は彼らの植民地だったので、言うまでもありません。軍事は、フランス軍が統括していました。宗教は、キリスト教が導入されましたが、現地人でフランス語を理解できるものが少なかったので、あまり広がりませんでした。それでもかなりの現地人が、キリスト教へ改宗しました。その他のことも、全てフランス人が考える通りになってしまいました。ですから、一世紀の間、全てフランス人が考えてくれたので、ニジェール人は何も考えなくてよかったのです。どうです。これが我々の現状です。お分かりになりましたか？」
　ムンバイの言うことを聞いて、早坂は背筋が寒くなった。植民地の後遺症が、これほどまで深く残っているとは想像できなかったからである。
「なんてひどい話なんだ」早坂は思わず呻いた。
「ええ、全くひどい話です。だけど、これがフランス人の残したものなんですよ。おかげで、今でも大半のニジェール人は、わずかなことでも論理的な思考ができなくなっているんです」
　これも洗脳の一種というべきものなのか？　見方を変えれば、フランス人たちは植民地での収奪を、かくも完璧にやり通していたということの証拠に他ならない。

　その日、午後はアウト・ドアの作業はなく、みんなホテルに篭もっていた。
　昼寝から覚めた早坂は、体のけだるさを持てあまして、ベッドを離れないでいた。
　すると、突然、天地をひっくり返すような大音響が起こって、窓ガラスがビリビリと激しく震えた。
　一体、何が起こったのだろうか？　不測の事態を想定して、早坂は窓辺へ走りよった。

　外を覗くと、正面の丘の上に、戦車が一台陣取っているのが見えた。しかも、その砲身からはまだ、かすかに白い煙が立ち上っているではないか。弾が放たれた証拠に他ならない。それを見て、早坂は、すわ戦争だ、と身を強張らせた。
　大砲が狙ったのは、ホテルと並んで建っている、国際会議場であるらしかった。
　下を覗くと、ホテルの一階を占拠した兵士たちが、国際会議場へ向かって激しい銃撃を浴びせかけていた。国際会議場の方からも、これに応戦する銃撃があった。
　そこへ敵の弾に当たって血まみれになった兵士がホテルの中へ転がり込んできた。早坂は打たれた人間を見るのは初めてだったが、かれの意識は局外者のそれだったので、まるで戦争映画を見るような気軽さで構えていた。
　一時間ほどの撃ち合いの末に、事態は終息した。国際会議場を守っていた方が、投降したらしかった。
　それを確かめようと、早坂が窓から身を乗り出した、まさのそのときだった。パチパチと音がして、彼の鼻先をかすめて弾丸が飛んだ。そして、覗いていた窓のコンクリートの框を、室内へ吹き飛ばした。
　彼がその弾に当たらなかったのは、不意に背後で鳴り出した目覚まし時計のおかげであった。自動小銃は早坂がアラームに振り向いた瞬間に撃たれたので、危機一髪、難を逃れられたのだ。もし千分の一秒でも振り向くのが遅れていたら、彼は確実に顔面を撃ち抜かれていただろう……。そう思うと、彼はゾッとなった。框に残った弾痕は六個。それは正確に、彼の顔があった位置と一致していた。
　彼の血は凍り付いた。まさに、九死に一生だった。そのとき、彼はさっきまで潰かっていた部外者意識の危うさを覚った。
　早坂は自分を狙ったのが誰かを知りたくて、恐る恐る下を覗いてみた。すると、そこには、銃を抱えて獲物を探すような一人の兵士がこっちを見上げていた。彼は、つば広のアーミー・ハットを被り、迷彩服を着て、一端（いっぱし）の兵士のように見えた。だがよく見ると、その顔にはまだ幼さが残っていた。
　早坂と目が合うと、少年兵は肩をいからせ、真っ白な歯をむき出してニヤッと笑った。その笑いは、とても無邪気な少年のものとは思えない、人を殺しなれた人間の冷酷さを宿していた。早坂の血は、再び凍りついた。

　数時間後、フランスのラジオが、ニアメに起こったことの全貌を伝えていた――――原因は、軍人への給料の未払いである。それに腹を立てた軍が、クーデターを起こしたのだ。殻らの目的は、国際会議場で自派の大会を開いて勢力を伸ばそうとしている大統領を拘束し、権力を奪取するこ

とであった。クーデターは成功し、大統領は拘束され、彼の政府は、即刻、瓦解した。

しかし、瓦解したのは政府ばかりではなかった。日本の無償援助も、ＩＭＦの融資も、一緒に吹っ飛んだ。その結果、子供たちは教育の機会を奪われ、国庫は空っぽのまま残された。

三日後、新しい軍事政権は空港の閉鎖を解き、早坂たちは無事ニジェールを出ることが出来た。だが、今回のミッションは何の成果も上げず。疲労だけが報酬の空しいものであった。

帰りの飛行機の中で、早坂の胸に、ムンバイの「日本のような国にしたい」と漏らした言葉が切なく蘇ってきた。そこへ、フランス経協担当のマダム・ベルナールの『アフリカ諸国はみんな独立しました。でも、独立というのは彼らにとって大きすぎる価値の転換だったので、いまだに消化しきれず、戸惑っているのです』と言った言葉が、重なって浮かんできた。

バカたれ、今、クーデターを起こしているようなときなんか！　そう吐き捨てた早坂だったが、自分の心がいつの間にか、近藤の言った自然淘汰の方へ傾きかけているのに気づいて、愕然となった。

砲弾で粉砕されるカンボジア難民スンプレットと報道カメラマンの交錯　難民と戦場の現実を伝える力作短編集　　送料共 1700 円

カンボジア難民ポ・シティの悲劇を描いた五十嵐勉の長篇小説
送料共 1700 円

受賞の言葉

六藍光洋

今回の受賞は、全く思っても見ませんでした。拙い作品を推して下さった審査員の先生方に、厚くお礼を申し上げます。

ここのところ、私は書くことに自信を失くしていました。いくら努力しても、世間に受け入れられているような形ものが書けなかったからです。そこで、才能がないので仕方がないと諦め、その代わり、自分だけにしか書けないものを書こうと、心を入替えました。それが駄作であろうと何であろうと、自分が本当に見、感じたものなら、それで十分ではないか。

私は、今、自分の物を見る感性をもっと研ぎすまそうと努めています。そして、最後に一作、自分で納得できる作品が書ければ、と思っています。

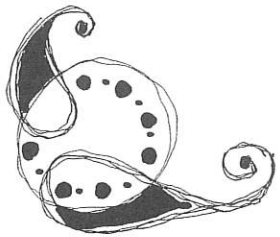
この作品は、ゴールにはほど遠いものです。七〇の手習い、未だ道半ばなり、です。

六藍光洋

ろくあい　みつひろ

1941 兵庫県生まれ
大阪大学文学部卒業
　71・80　渡仏
　フリーランス通訳

「砂漠」第５回『文芸思潮』エッセイ賞奨励賞受賞
「オアシスのリハビリ」第６回『文芸思潮』エッセイ賞社会批評賞受賞
「言葉は武器なり」第８回銀華文学賞優秀賞受賞
「間一髪の恐怖」光文社文庫
「またまた奇妙にこわい話」優秀作
「マダムの執念」光文社文庫
「すこぶる奇妙にこわい話」優秀作など



銀華文学賞優秀賞

ワニタンうどんはソマリア・レシピ

大森康宏

一

「海賊の国でうどん屋……？」

まじで？　とアリ・ムハディの顔をのぞきこんだ。

「ぴり辛のソマリア風みそ煮込みうどん、自信あります」

ふーん、とおれは黙り込んでしまった。ムハディは綺麗な日本語を話す。一年前、二メートル近い黒人が、ぬっと店に入ってきた時には、後ずさり、思わず包丁に手を掛けた。かけうどんを食い終わると、「あのっ、雇っていただけませんか……」と言われ、転けた。

「きつねうどん、わかめ入れて」入ってきた客に、はいよーっ！　と大声でいった。

うどんの玉を両手で強く湯切りすると、丼に空けた。わかめと揚げをトッピングして熱い汁をかけ、刻みネギを振る。歌舞伎町・雑居ビル一階入口の立ち食いうどん屋、五坪ほどの店は詰めれば十人ほど入れる。けっこう繁盛している。なんとか男一人、かつかつ食っていけるしのぎにはなっている。

「ワニタンを煮込んだソマリア風味噌煮込みうどん、コラーゲンたっぷりで、これはうまい」

「ワニタン？」

「ワニの舌です」

「あんた、アフリカ人？」きつねうどんが手を止め、顔を上げて聞いた。

「ソマリ人」と胸を叩き、真っ直ぐに背筋を伸ばした。

政権が崩壊して二十年がたつ。以来、破綻国家として、無政府状態がつづいている

「彼はオックスフォード大学出の弁護士の卵で、ソマリアでうどん屋を開くんですよ」

「オックスフォード大学の、弁護士……？　ふーん」

あとひと月でムハディがいなくなる、ふっと、一抹の寂しさを覚えた。

来週ロンドン経由でソマリランドに帰るというムハディを誘い、歌舞伎町の行きつけの店に行った。無国籍料理を食わせる店で、オーナーは韓国人だ。

「タンカー一隻襲えば百万ドルになる。身代金の交渉するのがプントランドの警察です」

「警察が交渉役？　国家ぐるみ、海賊で食ってるわけだ……」

「仕事がないから、しかたなくボートに船外機取りつけて海賊に走る。みんな日本の若者と同じ、優秀な人間たちです。一番必要なのは学校なんでしょうけどね」と熱っぽく語る。

ソマリアには多額の国際援助が集まる。彼らは、援助物資の横流しで生計を立てている。

「資金はどうするんだ。あんたが貸し付けるわけじゃあるまい」

いいえ、と首を振った。

「ロンドンにいる十五万のソマリ人が主なスポンサーです。皆、いつか祖国へ帰る日を夢見て小口投資の『ソマリア復興ファンド』というのを立ち上げました」

哨戒機を飛ばし、護衛艦で取り締まったところで、仕事がなければ海賊はなくなるまい。

「小口投資って言ったな。一口いくらだ」

「米ドルで十ドル、日本円で千円です」

「ようしっ、おれも乗る。三十万、三百口だ」

「えっ、三十万?!　ほんとですか」

「餞別だよ。アフリカに乾杯」

「ねえ、いっそ、ソマリアに来ませんか」

そう言い、おれの目をのぞき込んだ。真剣な眼差しである。

「おれが、ソマリアに……？」

何を言い出すんだこいつは、とグラスを置き、思わずムハディの顔を見た。黒ダイアのような大きな瞳が、じっとおれを見つめている。

「歌舞伎町のお店をそのままソマリアに移植するんです。『花川戸』の暖簾分けですよ」

ムハディが上ずった声で言う。おれは面食らった。アフ

リカ大陸で暖簾分け……？

五十路の坂の登りに掛かり、このまま歌舞伎町の塵埃にまみれて終えるのも人生なら、無聊をかこつ独り身の、日本では見つけられなかった新しい人生をアフリカ大陸で探す、それも又一つの生き方だろう。歌舞伎町から飛び出す転機になるかもしれない。

行ってみるか、「アフリカの角」に……。

二

ムハディは、予定通りロンドンに発っていった。十数人の見送り客が彼を囲み、中にひとり、日本人らしい小柄な女性がムハディに寄り添っている。二十代前半だろうか、真っ白のティーシャツにジーンズ、白のパンプスを履き、髪をひっつめに結っている。

「わざわざ見送りに来てくれたんですか」

無国籍料理屋での話は、すこし時間をくれ、ということで終わっている。年内に返事をする約束だが、あと二月、正直決めかねている。

「ザイニ・モガベ教授です。筑波大学の東京キャンパスで経済学を教えています」

教授が名刺を差し出す。おれも「下町うどん・花川戸」と刷った名刺を渡した。

「ソマリランドのうどんチェーン、どう思います」

経済の専門家、ファンドの運営顧問の意見に興味を持った。

「五千ドルで自分のお店がもてる、担保も要らない。若者たちは、飛びつくと思います」

「ファンドの総額って、どれくらいあるんです」

「米ドルで一千万ドル、日本円で十億ぐらいです」

「十億……」

「うどんチェーンの予算枠はそのうち五十万ドル、一人五千ドルで百店舗分です」

教授の言葉に、なるほど、と頷いた。

「じゃあもう行きます、待ってますよ、マスター」

ムハディはボストンバッグを片手に、足早にゲートに向かって歩いていった。ひっつめ髪の女性がムハディの左腕を握り、追いすがるように後ろからついていく。ゲートの入り口で足を止め、ボストンバッグを置くと、女性の両肩を抱き、軽く唇にキスをした。

「手紙頂戴ね、アリ」女性が小さく言った。振り返り、手を振りながら頷いた。

京成電鉄の乗り場に向かおうと踵を返したとき、あのっ、と呼び止められた。

「立花花子と申します。アリからマスターのことはうかがっています」

「ああっ。彼、何も話してくれなかったな、あなたのこと。

どちらにお住まいです」

「讃岐です、父が製麺工場をやっています」

それでおおよその納得がいった。

「アリに日本語を教えたのは立花さん？」

「はい」と頷く。

「アフリカでご縁が出来そうですね」そう言い、名刺を差し出した。「立花製麺所・取締役 立花花子」とある。

讃岐に帰るという花子と別れ、店に戻った。衝立の奥で白衣に着替え調理帽を被ると、お帰りなさいと、手伝いの佐和が微笑んだ。気の良い寡婦で、高校一年の娘がいる。自分の総菜の店を切り盛りしているから、料理はお手のものだ。総菜以外にももっと手を広げたい様子である。

「海賊はアフリカに帰ぇったのかい」

カウンターの客が、天ぷらうどんを啜りながら言った。

「今日、ロンドンに発ちました。ひと口乗りますか、うどんチェーン」

「そのつもりだぜ。あんたも出資者だろ」

「三百口。けど、ワニタンを煮込んだ味噌煮込みうどんって、どんなだか」

「さっきから何の話してんの。ワニだのアフリカだの、チェーンがどうしたのってさ」

隣で缶ビールを飲みながらザル蕎麦を啜っていた中年の女性が、怪訝そうな顔を上げ、言った。歌舞伎町でスナックを経営するママで、店の常連の一人だ。

「弁護士の海賊青年がな、『花川戸』の暖簾をアフリカで展開するんだとよ。一口乗るかい」

「マスターが肩入れするんならあたしも十口乗るわ。いま払おうか、一万円」と言ってハンドバッグから財布を引っ張り出す。瓢箪から飛び出した駒が勝手に一人歩きし始め、おれは慌てた。

三

日曜日の朝、新宿の紀伊国屋に行き、アフリカの地図とソマリア、アフリカ関連の本をごそっと買い込んだ。居間のテーブルの上に、持ち帰ったアフリカの地図を広げた。

アフリカの角、と呼ばれているソマリアは、大陸の東端に位置し、インド洋に張り出している。大きさは日本の約一・八倍、人口はおよそ九百万、うち三百五十万人がソマリランドに暮らす。一人当たりのGDPは六百ドル、月五十ドルだ。一日二ドル足らずで暮らしている人間に、どうやって味噌煮込みうどんを売り込もうというのか。

パソコンを立ち上げ、「ビザ・ソマリランド」と打ち込んでみた。すると「エチオピアで取るソマリランドのビザ」という見出しが出てきた。プリントすると、ビザはエチオピアの首都アディスアベバのソマリランド出張所で取得で

きるという。

おれは頭を上げた。地の果てソマリアが、一歩近づいてきた。

ドアをノックすると、どうぞ、という教授の声がした。虎屋の羊羹を提げ、中に入った。

「お待ちしていました」と笑顔で右手を差し出す。完璧な日本語である。

開け放った三階の窓から、学生たちのさわぐ若々しい喧騒が飛び込んでくる。

「今日はファンドのお話でしたね。資料を用意しておきました。マスター、英語は?」

「若い頃、アメリカに五年暮らしてたことがあります。以来ずっと、CNNニュースを聞くようにしていますので、まあ、なんとか」

手渡された週刊誌サイズの書類の表紙には「Somalia Reconstruction Fund」とあった。

「ハルゲイサの町に、建物を見つけたそうで、全部で二百坪。そこを本部にするそうです」

「二百坪……?」

歌舞伎町の店をそのままアフリカに移植する、と聞いていたおれは、絶句した。

「舞台はアフリカですよ、歌舞伎町じゃあない」アリの、真剣な眼差しが思い出された。

「讃岐の立花花子さんは……?」

「アリは結婚する、と言ってますが、お母さんが……」

「ほんとに、ソマリアに渡る気なんですか」教授は、小さく頷いた。

「来年三月のオープンに合わせて、彼女も現地に入る予定です。マスターが行く、と聞けば気持ちが変わるかもしれない」と探るような目をおれに向けた。

立花花子は、結局母親の了解が得られぬまま、うやむやな形でソマリアに発っていった。

二月の半ばまでには出発する、と返事を打った。店は、話し合った結果、共同経営という形で、資本金百万の株式会社組織に組み替え、佐和とおれが協同代表、ということになった。総菜店の経営を多角化したい、という彼女のかつての思いとも重なった。ずっと店の経理を任せてきた税理士のアドバイスもあり、そうすることにした。新宿三丁目のマンションは、管理人に頼み、掃除婦を紹介してもらって、週一回、部屋に風を入れ、掃除やその他のメンテを頼んだ。

浅草・花川戸の悲田院に詣でた。和尚に事情を話し、お布施を包んで供養を頼む。

丁寧に水を掛けると線香と花を供えた。手を合わせ、ア

フリカ行きを吐露すると、

「あんたって人は、いくつになっても子供みたいだね」というおふくろの声が聞こえた。

四

BE007便は、一時間遅れで成田を離れた。離陸して三十分ほどで機体が水平飛行に移ると、飲み物が配られた。おれはウイスキーのオンザロックをダブルで頼むと座席を倒した。酒を呑んで酔いつぶれる、それが長距離フライトのコツだ。

ロンドンで二日を過ごすと、いよいよケニア航空・ナイロビ行きの便に乗り込んだ。窓際に座り、食い入るように下界を眺めた。地中海を過ぎると、いきなり広大な褐色の大地の広がりが目に飛び込んできた。サハラ砂漠だ。初めて見るアフリカの大地に、釘付けになった。赤土から逃れるようにサバンナの緑が点在し、シマウマやキリン、アフリカ象の群れが移動するのが小さな点になって見える。日本では動物園の檻の中でしかお目に掛かれぬ連中だ。砂漠は速い速度で南へ浸食を繰り返しているという。これを食い止めるために、世界各国が資源の見返りを条件に、競って環境保全投資を行っていると聞くが、この赤土の広がりを目の当たりにすると、焼け石に水、という気がする。

ナイロビを定時に飛び立ち、ソマリランドの首都、ハルゲイサの空港に着いたのは、現地時間で午後三時過ぎだった。荒涼として、愛想のかけらもない施設だ。それでも、コンベアーで運ばれてくる荷物を待つ間、周囲の乗客の表情に明るさを見いだした。

「マスター!」と言う声がして、さっと目をやると、ゲートの手すりの外にアリと花子が手を振っている。助かった、ととたんに足が萎えた。

五

アリの運転するランドクルーザーに乗り、本部事務所、兼住居に向かった。ハルゲイサの街までは十キロ、三十分で街に入った。やたらと動物が多いのは、ソマリ人が生まれながらの遊牧民であることと関係があるのだろうか。驚いたのは、街中を走っている車の大半が日本製の中古車ということだ。いすずのダンプや、色の剥げたペンキで「仔ひつじ幼稚園」と羊の群れを描いた乗り合いバスも走っている。街のあちこちで青空市が立ち、食べ物や衣類、日用雑貨を並べて売っている。とにかく、街に活気がある。

二百坪の本社事務所兼うどんレストランは、ほぼ準備が整っていた。ガラス張りの出窓スペースは手打ちうどんの実演場である。腰の高さの白木のカウンターは檜板だ。

「いつでも打てますよ」

そう言い、厨房に案内された。ぴかぴかのステンレス・

キッチンセットがコの字型に並んでいる。厨房の奥にドアがあり、そこがおれの部屋のキッチンと居間に通じている。
「さて、これからどうする」
一通り建物の内部を見て回り、三人で事務所のテーブルを囲んだ。
「開店まであと二週間、来週、タフマン社長をいれて全体会議をやりましょう」
花子の入れたコーヒーを飲みながら、アリが言った。香りがあり、味は悪くない。
「マスター、二、三日休んでください。お疲れでしょう」
「マスターはやめてくれ、アリ。ボスが使用人に対してマスター、ってのはまずいだろ」
「そうですか？　じゃあなんて呼びます」
「おれの名前は真琴だ。アメリカ時分はマックって呼ばれてた、マックでいい」
「マック……。じゃあ、ビッグ・マックだ、ねえ、ハンナ」
「ハンナ……。なるほど。まあ何でもいい、万端、宜しくお頼み申します」
小さく足を開き、両手を腿に置くと、軽く頭を下げた。

一晩、死んだように眠った。カーテンのすき間から陽が漏れている。時計を見ると八時だ。しまった、と跳ね起きた。店を開けなければと、慌ててカーテンを引いた。

目の前をラクダが一頭、悠々と歩いていく。ターバンを巻いた男が背中のコブの谷間に座り、何か大声でわめいている。
「ん……？　歌舞伎町にラクダ」
夢でも見ているのかと、両手で頬を二度叩いて、目が覚めた。おれはソマリランドの首都、ハルゲイサに来ている。十二時間、前後不覚で眠った。
ハルゲイサは標高七百メートルの高地で、朝は思ったより涼しく、湿気もない。トランクからデイパックを引っ張り出し、パスポートと携帯電話、現金千ドル入りの財布を押し込むと、表に出た。斜め前に五階建てのホテル・タムリンがある。頭にベールとスカーフを被り、足首まで長い布を巻いた女性が足早に寄ってきて、「ミラーは要らないか？」と英語で言った。椿に似たぎざぎざの葉っぱを、枝つきのまま目の前に突き出す。ミラーは覚醒植物で、酒を呑まないソマリ人はこれを主食のように食べる、と聞いた。
「米ドルでいくらだ」
「ドルなら十ドル」
と言う。黙って金を払うとにっこり笑い、サンキューと言って離れていった。おれがドルを渡す現場を目撃して、子供や年齢不詳の男や女がわっと群がってきた。
「アッツラーのお恵みを」と言って両手を突き出す。
「ノー・アッツラー」と手を振ると、あっさりと散ってい

った。ずいぶんと諦めが早い。
いきなりサイドカー付きのバイクが、砂塵を上げておれの横に急停車した。
「タクシーです。観光案内するよ、ミスター。二時間二十ドル」
まだ二十代前半と思われる髭を生やした若者が綺麗な英語で言った。
「町をあちこち観光して、エチオピアの国境の町ワチャーレまで行きます」
「十ドルだ」
「十五ドル、前金です」
いいだろう、と金を払い、乗り込んだ。でこぼこ道を揺られて十分、中央市場に着いた。
無数のテントが並び、さまざまな品物がかけ声と共に商われている。市場の周りは、人間の人いきれと動物と糞の匂い、ヤギの鳴き声、走り去る車の砂ぼこり、排気ガス等で、異様な熱気と、果物の腐ったような濃密な匂いに包まれている。
「ミスター、名前は？　ぼくはハムダニ、ソマリ人」
「マックだ。マクドナルドのビッグ・マック、日本人だ」
「ハルゲイサ大学の英文科の四年生です。仕事でソマリランドに？」
「うどんを売りに来た。ここの人間はうどんを食べるか」
「ヌードル……。豚以外は何でも食べます。値段は？」
「ワニタンの味噌煮込みうどんが五ドル。どうだ……」
「パスタと同じ値段だ。行けると思いますよ」
ハムダニが、それは、と手にしたミラーの束に目をやった。
「さっき女性から買った。これを生で食うのか」
そうです、と言い、バイクを止めた。葉っぱを毟って口に入れ、むしゃむしゃ噛み始めた。おれも千切って丸め、口の中に放り込んだ。苦い、こんなものをよく食うな、と顔をしかめたが、噛んでいるうちに、少しずつ気持ちがリラックスしてきた。
どうです、と意味ありげにおれの顔を覗き込んだ。
「なるほど、悪くないな。君も毎日これを食ってるのか」
「これを噛みながら運転する、パーティーもやる、それがソマリ人の唯一の楽しみです」
ハムダニの話しでは、ミラーは隣のエチオピアで栽培され、各地に売られているという。エチオピア経済を支える重要な資源の一つで、ソマリアは最大の得意先だそうだ。

六

杞憂だった。本店のグランドオープニングの日、店の前には長々と行列ができた。何ごとかと、さらに人や動物が集まってくる。赤い民族衣裳をつけたマサイ族の数人が人の列に牛を売りつけている。今朝一番で仕込んだ五キロの

うどん生地三枚は、二枚が早々に売り切れた。慌てて生地をもう一枚仕込みに掛かる。ショーウインドーの周りには見物客が群れ、押すな押すなと、訳の分からぬソマリ語で怒鳴り合う。

この日は、グランドオープニングの特売としてメニューを味噌煮込みうどん一本に絞り、一ドルで売り出した。これが効いた。前宣伝と口コミとが合わさって、朝九時の開店前から人が並び始めた。一時間待ちと聞いても、列を離れようとはせず、じっと順番を待っている。割り込みもなければ、小競り合いもない。手づかみで物を食う、と聞いていた彼らが、テーブルに備えた塗り箸を上手に使うのにも驚かされた。

「マック、一休みしませんか」マルボロを一本くわえ、ライターで火を付ける。大きく吸い込み、ふーっと吐き出すと、にっと笑う。午後三時には店を閉めた。行列に並んだまま食にありつけなかった客には、「花川戸」と染めた藍染めの手ぬぐいを配った。

グランドオープニングから半年が過ぎた九月半ば、おれはタフマン社長について、エチオピアとの国境の町、ワチャーレの難民キャンプに来ていた。AU（アフリカ連合）の難民救済センターに頼まれたうどんの炊き出しである。社長が、ワチャーレを取り仕切る氏族の長と、南部ソマリアに駐屯するアフリカ連合の平和維持部隊、および、ジブチの日本大使館に話を持ちかけ、まとめたイベントだ。キャンプには約千人の難民が、国連の用意したテントに暮らしている。彼らには無料で配るが、AUからは千食分の味噌煮込みうどんの代金と、資材の運搬費やスタッフの出張経費など、合計一万ドルが入る。このうち四千ドルが、氏族の長へのキックバックとして支払われる。難民は腹がふくれ、氏族も儲かり、アメリカの援助があるからAUの腹も痛まず、八方まるく納まる、のだそうだ。

事前に仕込んで持ち込んだ千食分のうどん食材は、五つの大釜で茹でられ、炊き出しが始まった。五列に並び、カップと塗り箸を渡された難民たちは、ぼろをまとい、ほとんどが裸足だ。顔に止まったハエを払おうともしない。ジブチに駐屯する約二百名の自衛隊員のうち、十名ほどが出張ってきて大使館員とともにキャンプの焚きだしを手伝う。湯気を立てるカップの中味に、難民たちは好奇の目を向ける。最初の一口を飲み込むと、なんだこれはと、またうどんにかぶりつく。その日の夕方には大鍋は全部空っぽになった。

炊き出しが終わると、残ったうどんをかき集めて他の具と一緒に煮込み、十名の隊員に配った。

「まさか、ソマリアでこんな物が食えるとは思わなかった……。礼を言います」

ボスらしい隊員の一人がそう言い、おれに向かって最敬礼する。年は三十代前半だろうか、アデン湾の海賊を取り締まり、難民キャンプの炊きだしを手伝う。

「マックです、お勤めごくろうさまです」そう言い、おれも敬礼を返した。

「沢村二尉です」

「二尉は、ご家族もご一緒ですか」

「単身赴任です、もちろん。この間男の子が生まれて、写真と手紙が届きました」

「へえっ、赤ちゃんが……。お国はどちらです」

「草加市、埼玉県です。任期あけで来月帰国します。早く子供の顔がみたいです」

胸ポケットから一枚の写真をとりだした。まるまる太った金太郎のような赤ちゃんで、まだ産着にくるまれている。目元が伍長によく似ている。思わず顔がほころんだ。

「マックさんは、東京ですか」

「花川戸、歌舞伎町で立ち食いうどんの店をやってます。アフリカ興しのまねごとですよ」

アリとの出会いと、ここに至るまでのいきさつを簡単に話した。

二尉が空になったカップをテーブルの上に置き、ご馳走様です、と合掌する。

「ソマリアは援助物資に毒されている。ソマリアだけじゃない、アフリカ全土が毒されている。このままでは、いつまで経ってもアフリカの阿鼻叫喚は解消しない。若者に仕事を与える、それが彼らを再生させる道です。マックさん、Great!」と、右手を差し出す。

「沢村二尉も、Great!」

おれもそう言い、差し出された手を握った。節くれ立ったハンマーのような手だった。指の付け根から第二関節までの石のような指ダコに、思わず顔を上げて二尉を見た。

「ジブチ本部から緊急連絡です」

部下らしい若い隊員が走ってきて、携帯電話を差し出す。二尉の表情が引き締まる。

「沢村二尉です。ハイ……、ハイ。日本の船、ですか…？了解、すぐに戻ります」

電話を部下に返しながら

「アデン湾の北でタンカーがやられた。引き上げるぞ。今ヘリがこっちに向かっている」そう言うと、さっと踵を返す。二、三歩あるき、振り向いた。

「マックさん、味噌煮込みうどん、うまかった。日本でまたお会いしましょう」

敬礼し、にっと笑う。少年のような涼しい笑顔だった。

それが、沢村二尉を見た最後だった。

七

手打ちうどんの研修に集まったのは十人、うち一人はハムダニだ。復興ファンドを利用してフランチャイズ権を買った。彼のサイドカーで市内見物した日から二年が過ぎている。

三人のプントランドの若者は、最近までロンドンの刑務所に入っていた。ソマリア沖でイギリスの大型漁船を狙い、三人でカラシニコフをかざして浸入したが、逆に捕らえられ、イギリスに護送された。裁判の後、三年の懲役刑を終えて今年、釈放されたのだった。

「楽な懲役仕事で日当までもらえる。そんな世界がどこにある、いつかまた戻りたい」

とうそぶく。三年の間に、七キロも太ったという。一攫千金を狙う海賊業に比べれば、一杯五ドルの味噌煮込みうどんなど、カタツムリの這うような気の遠くなる仕事だ。十人を三班に分け、うどん生地の仕込みから説明していく。中力粉と塩水とを混ぜあわせ、手でこねる水回しのコツを何度も体験させる。生地の良し悪しはこのプロセスで決まるのだと、叱咤する。

「ほんとうに客が来るかな……」

三人組の一人が声を潜め、ぽつんと言った。ハジジがちらと彼を見た。店は三人の共同経営である。プントランドの首都、ガロウエのショッピングセンターの一角に「花川戸」の暖簾を出す。プントランドは、ここほど治安が良くない。モガディシュを追われたアルカイダ系テロ組織アル・シャバーブが地下に潜り、時折、小規模な戦闘が起きている。

「ダメならまた海賊に戻ればいい。ロンドンの監獄はいつでも受け入れてくれる」

ハジジがこともなげに言った。

「おいっ、カラシニコフは捨てたんじゃなかったのか。人に奉仕してゼニをもらう、真っ当に生きる、それでうどんフランチャイズを買ったんだろうが」

おれは少し声を荒らげた。刑務所の方が暮らしやすい、というのは彼らの心の隅にある。

「五千ドル投資したけど、プントランドで売れるかどうか、まったく分からない。ダメだった時のことを話しているのさ」

「ソマリランドでは売れている。もう三十店舗が稼働している、それが証拠だ」

アリが盛りつけの手を止め、割って入った。

ガロウエ一号店のグランドオープニングは、一日、閑古鳥が鳴いた。売れたのは五食足らず、仕込んだ百食分のうどん、具材はほぼそのまま売れ残って、冷蔵庫に押し込まれた。翌日もその次の日も客足はさっぱり、勢い込んで駆けつけたおれたち三人は、手持ちぶさたで、店のテーブル

に座り、ぼんやりと通りを行くラクダの群れを眺めていた。ハジジは初めは強気でいたが、次第に言葉少なになり、厨房の奥にへたり込んだまま、やたらとミラーを噛んでいる。アリと花子は四日目にハルゲイサに帰って行った。アリに頼まれ、おれはそのまま居残った。

「あんたとこのセールスマンに騙されたよ。必ず儲かるって話だったけどさ」

ハジジの母親が吐き捨てるように言い、厳しい顔でおれを睨む。

「まだ始まったばっかりだ。おれの店も、常連が来るようになるまで三年掛かっている」

諭すように、母親とハジジに言った。

「三年……？　あんた、なんか勘違いしてんじゃないの。アフリカじゃ栄養失調や戦争やエイズ感染で、みんな二、三歳で死んじまう。三年なんか待ってられっかよ！　ハジ、あんた、どうすんのさ。父ちゃん帰るまでこんな商売続ける気かい」

母親が激しい剣幕でまくし立て、ハジジに詰め寄った。

「マック、おふくろの言うとおりだ。三年は長すぎる。二週間経ってもこのざまだ」

そう言い、ミラーを口に放り込む。他の二人もポケットから葉っぱを掴みだし、無造作に噛んでいる。皆、黙ったままだ。さくさくとミラーを咀嚼する音だけが、空っぽの店内に響く。キキーッ！と裏庭で雌鳥がけたたましく鳴いた。腕を組み、じっと三人の様子を見つめるうちに、ふっとハムダニの言葉が胸をよぎった。

「こいつを噛みながら車を運転し、パーティーもやる。それがソマリ人の唯一の楽しみです」

ミラーはイスラム経典、三度のメシと同位置にある。これだ……！

「作戦を変えてやり直してみようじゃねえか」

ハジジがそっと顔を上げた。他の二人もおれを見る。

「いま、新しいメニューを思いついた」

「新しいメニュー？」三人が同時に言った。黙って頷き、にっと笑った。

「ミラー・味噌煮込みうどん定食だ」

「ミラー、うどんテイショク……？」

「おうよ、ソマリ人が常食してるミラーよ。日本で定食を頼むと、メーン・ディッシュと一緒に、必ずメシと汁と新香が付いてくる」ぐるっと三人の顔を見回した。

「ミラーの小枝を一本、うどんに添える。値段は同じ五ドル、メニューもこの一品に絞る。うどんを啜りながら客同士がミラー・パーティーで盛り上がる、って寸法だ。どうだ」

三人は一瞬ぽかんとしていたが、顔を見合わせ、みるみるその目が輝いた。

「ミラーうどん喫茶か……。それならうどん抜きのワニタ

ン・スープも売ろう」
ハジジが背をまっすぐに伸ばして言った。
「ハジジ、上質のミラーが安く手に入るか」
「従兄弟がアディスアベバで栽培している。モノは確かだ。市価の半値で手に入る」
「決まった、それで行こう」

木箱に入ったミラーが店に届いたのは、それから一週間してからだった。取りあえずは一箱、百ドルである。きれいに水洗いし、剪定ばさみで一本一本、丁寧に小枝を切り離した。試食してみると、葉が柔らかく、色がつやつやして舌触りも良い。香りも悪くない。「ハジジ、こいつはいける」言われて彼も葉を口に含み、うむ、と頷いた。

入り口横のメニュー・ケースの中味を入れ替えた。大小の漆のトレーを二つ並べ、大きいトレーには、味噌煮込みうどんと新鮮なミラーの小枝を一本添え、横に五ドル、と表示した。小トレーには、ワニタンスープと小枝を二本、同じく五ドルと表示する。

三人が交代で店の前に立ち、ミラーの束を片手に大声で客を呼び込んだ。おれはショーウインドーに入って朝から手打ちの実演をした。ぽつぽつ人だかりが出来るようになった。
「店の外にもテーブルと椅子を並べたらどうだろう」

三人組の一人が言った。ハジジがぱんと手を叩き、「良い案だ」と言った。すぐに丸テーブル二脚と長テーブル、長いす一脚が運ばれてきて、十人用食卓が出来あがった。これが当たった。屋外のテーブルに座り、定食を注文する客が一人、二人と現れた。中の様子を窺いながら、おずおずと暖簾をくぐる客も出てきた。店の内外でうどんをすすり、ミラーを噛みながら声高に話し合う連中に釣られて、また客が入ってくる。平均六十食、多い日は百食をこなすようになった。
「出前もやろう」もう一人が言った。出前？　とハジジが眉をひそめる。
「あそこの爺さんが、テイショクを出前してくれとさ。忙しくて手が放せないそうだ」

通りの向かい側で、カタカタと日本製の中古ミシンを踏んでいる六十がらみの男がいる。脇に十歳ぐらいの兄妹と思われる二人の子供が、男を手伝っていた。
「おれが持っていく」トレーに乗せラップを掛けるとミラーの小枝を添え、通りを渡った。
ミシン男はトレーを受け取ると、食べろ、と二人の子供に手渡した。兄妹は一つの丼を、仲良く二人で啜っている。
「ハジジ、メニューを配ろう。チラシとメニューを子供たちに配らせ、注文を取って配達もさせる。注文と配達で三千、配達だけなら千五百シリング払う」

翌日、チラシを十人ほどの子供に配らせ、注文も取らせた。注文と配達で三千もらえると聞き、血眼になってご用聞きに走る。子供同士でつかみ合いの喧嘩になることもあった。

海賊の元締めが店にやってきたのは、ミラー定食を売り出して十日ほど経ったころだった。ハジジの昔の仲間で、五人連れで現れた。三十代後半、長身、長髪の、見るからに精悍そうな三白眼である。さすが交渉事に慣れた海賊、流ちょうなイギリス英語を使う。
「パイソンだ」
「マック。ハルゲイサの本店で、手打ちうどんの指導をしてます」
「日本人か」訝しそうに眼を細め、ねめつけるようにおれを見る。
「そうです」おれもじっとパイソンの目を見た。暫くにらみ合うと、ふっと目をそらした。
「アデン湾もソマリア沖も、最近は外国の哨戒艇や軍艦が走り回って、上がったりだ。仲間も減った。商売替えしようか、と思ってな。ハジ、テイショク五人前だ」

そう言い、じろっと席を見回す。パイソンと目が合うと、まわりの客がいっせいに腰を浮かせ、テーブルの隅に固まる。珍種の食い物でも食べるように、恐る恐る口に持っていく。一口すすり、ゆっくりと顔を上げた。
「うまいな。ソマリアの郷土料理の味がする……。おまえが考えたレシピか」
「フランチャイズを買えば、この人が全部教えてくれます」パイソンがちらとおれを見た。
「元手は幾ら掛かった」
「五千ドル。無担保でファンドの金が借りられます。もう、海賊では食えませんよ」
「そうだな……」

ぽつんと言い、力なく頷くと、遠くの南の空を見つめるように三白眼を泳がせ、ぶるっと一つ、武者震いをした。一瞬、顔が引きつり、右頬の赤いトカゲがぴくっと尾を振った。
「以前、ジブチに駐屯する自衛隊の中に、サワムラ、という二尉がいた」

パイソンがおれの顔をじっと見つめ、問わず語りにぼそっと言った。
「優秀な軍人だった。今の世にも、あんなサムライがいるのかと、感服したよ」
「沢村二尉……？　二尉を知ってるんですか」
「ソマリア沖で何度かぶつかった。めっぽう強かったな。極真空手の達人だそうだ」
「彼は二年前に日本に帰ったはずです」パイソンが首を横

に振った。
「死んだ。二年前の九月、日本に帰ったが、その半年後、死んだと聞いている」
「死んだ？　沢村二尉が死んだ！」
「アデン湾の北で、日本のタンカーが襲われたことがあった」
　あの日だ……。ワチャーレの焚きだしに行った日だ。十名の隊員と一緒に、うまそうに味噌煮込みうどんをすすっていた。
「対岸のイエメンの海賊どもだ。こんなおれたちにも、仲間うちの仁義ってもんがある。あのくそガキどもには、そのかけらもない。身代金を奪っておいて、人質をなぶり殺しにする。女も子供も年寄りも容赦しない、そんな腐れ外道だ、あいつらは。サワムラは、そんな奴らが許せなかったんだろう。単身、突っ込んでいった」
「……」
「任期あけで、来月帰国します」
　嬉しそうにそう言い、産着にくるまった金太郎の写真を見せてくれた。
　一瞬、ナイフで胸をえぐられるような痛みが走った。

八

　花子が身ごもったと聞いたのは、ガロウエから帰ってしばらくしてからだ。アリ・ムハディーが嬉しそうに話してくれた。彼女も喜んでいる、という。
「そらよかった、おめでとう」とアリの手を握った。
　花子が讃岐に電話を掛けたそうだ。ソマリランドに渡って三年、彼女は一度も日本に帰っていない。勝手に飛び出してきた手前、彼女にも意地がある。身ごもって初めて、生みの親の気持ちが理解できたのかもしれない。黄泉の国から掛かった一本の電話で、凍り付いていた親子の確執が、春さきの根雪のように溶けた。
「無事に生まれたら、三人でいちど讃岐に帰るつもりです」
「そりゃいい。喜ぶぜ、おふくろさん。アリ、実はおれも帰ろうかと思う、日本に」
「えっ……？」
「歌舞伎町でまた、立ち食いうどんの商売をやる。パートナーの佐和から手紙が来た。店は赤字で、早く帰ってこい、と怒ってる」
「サワさんが？　お店が赤字？　そうですか……。もう三年になりますか」
「どうだい、フランチャイズの売れ行きは。いま何店できた」
「ソマリランドで三十五店。この分では、ソマリアで百店は無理かも知れない」
　フランチャイズの数よりも、味噌煮込みうどんが五ドル

で売れているという現実、その方が驚きだった。ハジジの店を入れて三十六店舗、これはアリの大成果だと思う。
「プントランドと南部ソマリアは、海賊に任せたらどうだろう」
　トカゲの入れ墨を思い浮かべながら、アリの目を見て言った。
「強烈な存在感があるな、あの男。海賊仲間がいっせいになびくと思うが……」
「名だたる元締めの一人ですからね」
　と頷き、しばらく思案している様子だったが、やがて顔を上げ、
「彼ならソマリアはおろか、隣のエチオピア、ケニアのマサイ族にも顔が売れているし、市場としてはそっちの方が遙かに大きい。面白いかもしれない」と早口に言った。
「おうよ、海賊を正業に就かせる、それがあんたの狙いだったはずだ」
　そう言い、一体の仁王像を見るような三白眼を思い浮かべた。
　店が気になっていた。先月、佐和からの手紙といっしょに、三年分の簡単な経理報告書が届いた。売り上げも利益も、半分近くに落ち込んでいる。佐和の手紙は、帰ってこい、というおれへの督促状だった。
「最近、『花川戸』はやっぱりマスターの顔で保っている、と気づきました。カウンター越しにぽんぽん弾ける掛け合い漫才のようなやり取り、そういうものがありません。お店の不振は、それが原因かと思ったりしています。三年経ちました、そろそろ帰ってきてくださいな。待っています。できたら、本当のパートナーになって欲しいな……？（冗談です。貴方の迷惑そうな顔が目に見えるようです、ほほほっ。　ご無事で！　かしこ　佐和」
　外観は穏やかな性格に見えるが、内面は芯の強い突っ張り型の女だ。手紙ではどこか頼りなげな様子である。自信をなくし、疲れて、少し落ちこんでいるようにも思われる。
「本当のパートナーになって欲しい……？」
　首をひねると、おれは調理帽を被り、前掛けのひもをきりっと結んだ。
　三十六店舗、アフリカの地に「花川戸」の暖簾分けができた。この辺りが、潮時だろう。
　大通りを、「仔ひつじ幼稚園」の大型バスが、砂けむりを巻き上げて走っていった。相変わらず、鈴なりの客だ。ステップに立っていた車掌の若者が、
「ハロー、マック！」と大声で言った。おれも手を振りハロー、と怒鳴った。

ソマリランドの一日が始まった。

それから十日ほど経った朝だった。いきなりドカン！という轟音と共に、店全体が一瞬ゆれた。厨房にいたおれは、本能的に身を伏せた。部屋のガラスが吹き飛び、床に散乱している。食器棚のガラスも割れ、丼や皿、カップなどが粉々になって飛び散っている。表通りで人のざわめきが聞こえ、おれは窓際に駆け寄った。斜め向かいの五階建てのホテル・タムリンの入り口から黒煙が上がり、中から大勢の泊まり客が半裸で飛び出してきた。やがて警察と消防と救急車のサイレンの音がして、消火活動が始まった。

おれは表へ飛び出した。時計を見ると八時、もう日は高い。「アル・シャバーブのテロだ」通りを埋めつくした野次馬から、そんな声がもれる。

店も被害を受けた。通りに面した手打ちの実演スペースは粉々に吹き飛ばされ、道路にガラスや器材が散乱している。子ヤギが一匹地べたに転がり、激しく体を震わせていた。

「若者に仕事を与える、それがアフリカ再生の道だ」

沢村二尉の言葉が耳に突き刺さった。

テロの残骸を目の当たりにして、おれは、呆然と表通りの混乱の淵にたたずんでいた。おれのアフリカでの三年は、いったい何だったのだと、駆け抜けて行った千日余りの時間をぼんやりと振り返る。終えてみれば、三十六店舗の暖簾が掛かったというだけで、アフリカは、以前と何一つ変わっていない。

「これがお前のアフリカ興しか？」夜郎自大もほどほどにしろと、あざ笑う声が聞こえる。

「そうではない！」と言う、別の声が聞こえた。

「ハジジとパイソンは、ケニア、エチオピアをも視野に入れ、うどんの販売に乗りだす、と聞いた。花川戸チェーンが海賊を更生させたのだ。少なくともソマリアでは成果を上げた。もっと胸を張れ！」

凛としたその声に、おれは目を開けた。

とにかく一粒の麦がアフリカの大地にこぼれ落ちた。やがて芽を出し、実をつける。ソマリアから大陸に広がって、そこに大陸のレシピが加わり、郷土料理として定着していく。アフリカでの三年は、決して無駄ではなかった……。帰ったら教授に協力して日本支部としてのサポートにまわろう。それがおれの、歌舞伎町からの援護射撃だ。その場にたたずみ、おれは動かなくなった子ヤギの骸を、いつまでもいつまでも、じっと見つめていた。

受賞の言葉

大森康宏

宝くじを買うようなつもりで応募したのだった。十一月中旬に最終結果を連絡、とあったので、外れた、とあっさり忘れていた。五十嵐編集長から電話を頂いたのは、十八日夜八時半ごろで、ビールを飲みながらNHKテレビ「懐かしの古賀メロディー」を見ていた。森進一の歌う「人生の並木道」を聞きながら、ほろりと、昔を思い起こしていた。「優秀賞、おめでとうございます」と言われ、何のことかわからなかった。嬉しさが込み上げてきたのは、二、三日経ってからである。可もなく不可もなく、このまま平凡に人生を終える、そんな諦念を道連れに生きて来た。その裏では、空を覆う真っ黒な雲も、裏側は銀色に輝いていると、一縷の望みも捨てなかった。生まれて初めて文学賞をもらったのだと、自分に言い聞かせる。胸の奥に、小さな自信の種が芽吹くのが分かった。これを浮力に、受賞作をしのぐ力作をものにする、そう誓った。

大森康宏

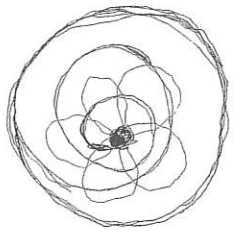
おおもり　やすひろ

1941　東京・浅草生まれ　神戸市在住

64　早稲田大学政治経済学部・経済学科卒

野村貿易、酒井重工業、川崎重工業、マック・コンサルタント等、海外での販売網構築業務を主体に会社を転々とし、ASEAN、ヨーロッパ、アメリカなどを渡り歩いてきた。

現在、特定NPO法人産業人OBネット・アドバイザー、神戸市・アジア進出支援センター・アドバイザーとして活動中

同人誌「八月の群れ」同人

趣味　クラシックギター、登山